

嗟するところに吾人の共鳴を惹くのである。併しリズムの上からは尙散漫で多少散文的の傾向あるやうだ。

地の子は大正四年から七年までの作四十六篇を抽いてある。大正四年の作では『墜されたる太陽』以下十三篇多くは短篇である。中に『月下の柩』などが新しい境地を諳つてある。併し措辭には尙洗煉を加へて欲しいものがある。『太陽空に高くあれど』の中には「世に悲しく呪はしきものは、限定なり牢獄なり」と自由の幻想の力をうたつてある。トラビスト修道詩集の中では、『アヴェ、マリアの鐘』などがまづ佳いであらう。大正五年の作では孤獨で温情にあこがれてゐる心情を諳つた作が多い。『風に吹かれて』『東京の街を』その他、『傷心』でも『濫い言葉に飢ゑてゐる群れ』でもさうである。『六年の作には、大戦に遭遇した氣分の作がある。中に『馬鈴薯と國際法』が秀でてゐる。『地を踏む感謝』がこれに亞ぐ。『七年の作中、『幕屋の上の雲』には、食がなく争奪がなく拒否がなくあるのは、すべて受容だけのかゞやか

しい地上を頌し、自ら先驅者となり、濠の埋草や椽の下の力もちをして、満足と歡喜と感謝とをもつことが自家の一切であることを諳つてある。そうして民衆的であることは一切の下積になるものとして、「私たちがいつまでもいつまでも一筋の街道の開作者、それに沿うた運河の川堀人足、その一點の都市の大尖塔を築く煉瓦の積み手、建築材料の運搬人」を擧げてゐる。百田氏が世界のあらゆる時代を通じての庶民精神の一つの代表的表現であるすべてを通ずる人間の聲である」と評したのはかういふ點であらう。『五月苦惱の日』には自然界は五月には新しく生れたものゝ、喜悅でかゞやいでゐるに、人間だけは被蔽物を跳ね除けないで、大戦を事としてゐるのを尤めた作である。集中で七年の作がすぐれてゐる。措辭は貧しいが、民衆的な又神に感謝する傾向はこの集には可成濃い色彩にあらはれてゐる。



第五十七章 民衆派の詩人(その三)

福田正夫

福田正夫。明治二十六年小田原に生る。

福田正夫は佛の田園詩人アルペール、サマンに感じて、大正三年半歳の勞作二十三篇と長篇二篇とを收めた農民の言葉といふ一詩集を出した。各篇いづれも飾り氣のない農民生活の告白詩である。五合の米をもつてお寺に集る老婆たちの『しちめん様の祭』にも、都會に求められない田園の美祿をたゞへてゐる。黒い土に見とれ榮えゆく果樹を見ては、「營々と燃える勞働のあと、しみ込んでゆく生の喜の光、汗のみちてゐる土の底へたましひも辿る」と謡つてゐる。從來も田園を謡つたものはあるが、氏は田園に對する深き理解と同情とを有し、農民の爲に憂へ農村の爲に氣を吐き、農民の意識しない幸

福と歡喜とを最も大膽に極めて素朴の表現を用ひて謡つた點に於ては傑出してゐる。『畦路から』稻を刈りながら村治を批評してゐる青年に傾聴し、ボコボコデン、ボ、コデンと響く大鼓の音やかましい御會式の題目にも、夢中の信仰を送るものと感激し、豊年を喜ぶ『農夫の言葉』に神を感じるやうな喜にうたれてゐる。又ヴェルハーラの所謂觸手ある都會の爲に農村の沈退してゆくを歎き、過勞の爲に低能兒の出るのを悲しんでゐる。柳澤健は「君の感激したといふサマンは病弱と唐類との美であるに、氏は健康と意志の美であつて、その違がひどすぎる」と評し、白鳥省吾は「愛すべき農民の泥まみれの顔と鍬の痕ある大いなる手とは一卷到る處にある」と評したのはよくその内容を語つてゐる。處女作であるが氏の作としては、恐らくは出色のものであらう。

氏は大正七年雜誌民衆を刊行し、大にその宣傳につとめ、忽にして民衆派詩人の驍將となつた。この誌上に透谷號を出したりホイツ、



マンに學んだトラウベル號を出し、後にはその譯詩集を出した。又詩劇哀樂兒及愛の焰の著もある。氏はその後の作を集めて世界の魂といふ詩集を昨年出した。これは民衆及科學と文藝に載せてゐた大正七年の長篇を收めたもので、散漫な傾はあるが、或人の評の如く思想の全面を太い線でぐいぐいと隈もなく語はうとしてあるやうだ。氏の作に對し、一つの感動の焦點を凝視して之をデリケートに表すことを求めるのは無理であらう。第一部孤獨の歌は寂しく悲しみが基調をなしてゐる。二部の人間の歌の諸篇は一部の諸篇よりも強く明るい響をもつてゐる。中にも太陽の歌大地の歌等が優れてゐる。三部の世界の魂は前二部よりも氏の心地の進境を示すもので中で黎明詩篇、民衆の國、世界の魂などが優れてゐる。氏は之等の諸篇によりて自由と憧憬と愛とを欲求してゐる。黎明の諸篇の一節を引けば

黎明は豫言だ

やがてうすれて行かうさも強い使命がある  
あゝ、曙が来るのだ

の如く。思ふ所を淀みなく説破してゐる。併し氏が近來の作は感情の至純を缺いてゐるか、そうでなければ唯雜然と述べ盡す傾が多く、詩としての價の乏しいものが多い。併し熱情があつて規模の壯大な點は取るべきである。

### 第五十八章 民衆派の詩人(その四)

#### 白鳥省吾

省吾は宮城縣築館の人。明治二十三年生る。

白鳥省吾は大正二年早大を出で雑誌詩歌などに評論を書いたり。少年少女の爲にあどけない天葉詩集を出したりしてゐたが、大正三年世界の一人といふ詩集を公にし、大正八年には詩集大地の愛を出し



て詩壇の位地を認められた。

大地の愛は大正三年より七年に至る百二十九篇を収めてある。その第一部の日の言葉十一篇は夙い作、輝く裸體二十篇、自然の聲三十一篇、力の嘆美四十四篇、宇宙の法燈二十二篇は大正四、五、六、七年のそれぞれの作から抽いたものである。その作風は年次によつて幾らかの差異もあるが、氏は人々の生活は「日々の糧」「日々の歌」この二つに全く溶けるものと思惟してゐる。而して自然の讚美者單純の愛好者である。「田園の祖父」を詠ひ、忍従の「母」を詠ひ、故郷の「光の家族」を詠ひ、幼時の記憶を懐しがる「誕生日」を憶ひ、夏の一日の「川涉り」を偲び、心はつねに郷國の栗駒山の麓、迫川の畔、麥青む畑、素足で大地の黒を踏むあたりに往來してゐる。「地の魅力」に感嘆し電車や軌道の傍に残された十坪に足らぬ「青草」にも曠野を思はせるに十分だと感涙を流し、大地の愛を讚美した。併し氏は自然を愛すると云つてニヒリストではない。「濁つて光る都市」は歡樂と

虚偽と魔睡と人を早く老いさせる強い酒のやうだと云ひながら、その築き上げた力は更に次の輝く力に進行し、世界は斯うして新しい世紀へ動いてゆくことを驚嘆し、「おお東邦の詩人よ」の中には新しい文明の衣を着けた都市や田園を讚美し、その奥の尊い脉搏美しい魂を更に讚めたゝへよと謡つてゐる。自由とかゞやきと健康と永遠とを風と太陽と大地と星とに則つて生命の流としてゐる。以上諸篇の中、大正七年の作が全體として優れてゐるやうに思はれる。その中の『宇宙の法燈』はホイットマンの影響を受けた哲理的の作であつて、人は宇宙の奥殿にともる法燈の如くあるべきことを詠じ、さて、

そは叡智の火、謙讓の火、歡喜の火、力の火

太陽に對峙すべき地上の火

燃えよ燃えよ壯大な人間建設の

あらゆる燃料を集めて各個人は燃えよ

と謡つてある會心の作である。「追はれた蛇」は發達してゆく都會を



諷つたもので、恐らくは集中の白眉であらう。人の生死を大地に訪れる曙と黄昏とのやうに薔薇色のめざましい力と朽葉色にうつむいてゆく陰影に比した『脈うつ生死』も面白く、『日の炬火』も力強い作である。次に追はれた蛇の末節を引いておく。

鋼鐵の匂ひと煙の咽びから逃れて

手斧の響き灯の明るさから脱がれて

いつさんに野に驅けこんだ蛇の姿が見える

うす黒い閃光をもつて柔かい土へうねり去る蛇が見える

天は晴れ地は煙る

生育の熾んな都會の五月の横顔

氏の詩は内容は別としてリズムが弛緩して散文的の傾のあるのは吾人の遺憾に思ふ點である。

氏は大正九年泰西名詩選の第二篇として譯詩ホイットマン詩集を出し、又小曲散文詩集幻の日にを出した。八十二章の小曲は夙く青春

の悩みなどを諷つたものを集めたもので、中で『無花果』『はつ秋』『ア  
カシヤの花』等が優れてゐる。

ひれもす寂し今日もまた

いつか習ひしこの孤獨

(無花果)

鳥の食みし無花果は

わが心臓か物言はず

大正十年詩集樂園の途上を著し、大正八九年の作八十一篇を抽いた。その中搖籃の郷土に收めた『地上の樂園』『古代の夢』『町の鐘』『つるり踊』以下の諸篇には淳朴は郷土の風向を諷つたものが多い。戦争の追懐の中には『牢獄は法律の下にのみない、晴れやかな青空のもとに、無限の沃野の上にもある。小作人となり下がった彼等には耕地そのものが、既に嚴かめしい監獄ではないか』と小作人に同情した作がある。日々の花束には都會の生活を諷つてあるが、『鎖を鳴らし』でも『一塊の麵麩』でも『月光の下に』でも『夜の一隅』でも多くは



都會の醜を諷つてある。聖壇の花束の始には唯美主義者貴族主義者を笑ひ

眞の美は俗塵のなかに

民衆のゆく路にあるを明かにしよう

眞の詩は貧しき者の襤褸のなかに

不遇なる者の顔にあることを示さう

と諷つてゐる。民衆的傾向が著しいことがこれらによりても知られる。中で『花環』などが面白い。永遠の男女の諸篇には両性のことを諷つてあるが、分婉や性交のそれらをパツシヨネートでなく靜に諷つたものが多い。淡々しいものであるが『翼ある種子』などが面白い題材である。太平洋の岸にての諸篇は海を諷つてあるが、その中吾人は『海陸合唱』を採る。現代の嵐の諸篇は炭坑を諷つてある。中に『選炭の乙女』、『坑夫長屋』、『少女坑夫』、『草山と少女』、『地獄極樂』等いづれも人氣の荒々しい、緊りのない將來の氣遣はれる礦山地方の

狀を諷つてあるが、『煉瓦を運ぶ女』がその代表作であらう。某氏が評したやうに、氏は穩順な土の詩人で、「氏の心に潜む民衆主義は焰のやうに上るものでなく、靜に沁み入る雨のやうに人の心を土の上に落ちつかせようとするもの」のやうだ。併し理智的な點が勝つて情緒的の熱が足りない。「實生活の印象を自由に平明に表現しやうとするのが私の行方だ」とその創作の態度を發表してゐるが、欺かすと謂ふべしである。

氏は大正二年頃より新聞に雑誌にその主張や詩に對する批判を時折載せてゐたが、それらを蒐めて詩に徹する道の一書として出した。民衆藝術論、詩の諸問題、現代詩人の群、自然の詩想の諸篇傾聴に値すべきものが少くない。惟ふに氏は詩論家として驥足を伸ばされる人ではあるまいか。



## 第五十九章 最近に於ける譯詩集

大正七年には米國民衆詩人ホイットマンやそれに師事してゐたホレス、トラウベル等に就き現代詩歌や民衆誌上に論議されてゐたが、その譯詩集の出たのは翌八年以降の事である。新潮社は泰西名詩選集の出版を企て、白鳥省吾はその第二篇として八年五月にホイットマン詩集を譯出した。ホ氏の生誕百年記念會はこの月有志によつて開かれ、現代詩歌はその記念號を出し、その他の雜誌にもこの詩人に關する記事を載せたものが少くなかつた。尋いでその翌月に至り富田碎花は草の葉上卷を、九年十二月にその中卷を出し、有島武郎は十年十一月にホイットマン詩集第一輯を出し、其の年譜を作り、千八百五十五年代の作『顔』以下四十二篇を擧げ、更に第二輯を出さうとしてゐる。大正八年十月トラウベルが遠逝したので、現代詩歌

は十一月その追悼號を出した、九年四月に至り福田正夫は泰西名詩選集の五編にトラウベル詩集を譯出し、富田碎花は蘇國に接したシエフイールドの近郊に鳥のやうな生活をしながら、社會改良運動を考へてゐたカアペンターの民衆主義の方へを譯し、大正九年七月カアペンター詩集として出した。白鳥省吾や加藤一夫などは盛に民衆詩人の大鼓をたゝいて、大にその宣傳に努めてゐる。併しその想に於ては取るべきものが多いに拘らず、措辭に見るべきものがないので佛蘭西近代の詩風を愉快する人々は以上の如きは詩ではないなどと評するものもある。そうして譯の上に於ても誤謬もあるのが少ないやうであるが、今は一々指摘することを略する。又歐洲の大戦は彼我の文學をも一層近接させる誘因になつたことは云ふまでもない。そうして戦時歐洲には他の文學よりも詩歌が盛んであつた。その狀況に注意する人々も少くなかつた。大正八年一月の現代詩歌に茅野蕭々は最近の獨逸の詩壇を紹介し、山宮允は短歌



雜誌に英詩壇の現代を説き、又米國の詩界の近狀を傳へるものもあつた。随つてそれらの國々の古き新しき詩集の譯出されたものが少くなかつた。

獨逸の方では生田春月が泰西名詩選集の第一編としてハイネ詩集を八年二月に出した。五月にはその第三編としてゲイテ詩集を出した。氏の譯は原文に忠なるよりも自家の情調を以て讀つてあることは自らも言つてある通である。併しその間に泰西名詩譯集といふ詞華集も出し、更に九年九月には愛誦詩篇私の花輪をも出した。この書には主に十九世紀前半に於ける獨逸の浪漫派詩人の作を譯出してあつて、氏自らハインリツヒ、ロイトオルドの「彼は現代には適しなかつた、彼は古人を愛しすぎた」の句に恰當する詩人だと言つてゐる。その如く新詩人の作はない。獨逸の新しい詩人を紹介したり、その譯詩を出したりしたのは前に述べた秋元芦風の方がその第一人者である。茅野蕭々はウールヘルム、シヨルツの詩を紹介したり、ライネル、

マリア、リルケの特質や詩想を説いたり、デエメルを論じたりした。けれども別に集は出さない。九年三月にデエメルは死んだがその記念の集も出すものもない。敵國となつた關係も大にあるではないかと思はれる。

英詩の方面はどうかと云ふに、大正七年に小林愛雄は佐武林藏と共に譯詩近代歌集を出した。この集には現代の桂冠詩集ロバート、ブリツヂェスを始め、ガルノスウオルシイ、イエーツ、シモンズ、ビニオン、ワイルド等の短詩數十章を收めてある。斯界に於ては山宮允、西條八十、竹友藻風を特記せねばならぬ。これらの人々は象徴派を帶び措辭に重きを置くところ、民衆派の作家とその趣を異にしてゐる。中に山宮氏はイマシズムを紹介したり、メーテルリングの詩を評したり、詩壇の狀況を説いたりしてゐたが、それらの論説を集めて大正七年詩文研究として出版した。また譯詩抄も出した。又大正十年一月に現代の英詩人六十三家の代表作を蒐めて現代英詩選

山宮允。明治二十三年山形市に生る。



集(英文)も出した。氏の譯詩に關しては、柳澤健は「もし巧緻精妙なる才氣に溢れた譯し方を見やうとするものがあつたら、或は失望することがないとも限られない。併し氏がいかに虚しい心で、熱い心で原作者と響き合ひ融け合うてゐるかを認むる讀者こそ何よりも著者を知る者」だと評してゐる。

西條の譯詩集白孔雀は英愛二國の詩人を主とし、獨白のそれも採つてある。氏の譯は創作を讀む感じがある。竹友藻風はワイルドやシモンズを顧みないでイエーツを選び、特にその傑作迷へるエエンガスの歌を巻頭に置いたことや、ロウエルやフレツチアの代りにジオンスン等を譯したことに共鳴してゐる。要するに氏の好んだ詩風に基き、表面美しいものより象徴の深いものを選んだのであらう。現代英詩人の中ではメエスフィールドやシング等最新傾向のものを採つてある。併し措辭に力を用ひる氏は新しいものを我が古い語で譯して折角の骨折が却つてあだになつたものも少しはある。マールリ

竹友藻風。明治  
二十五年大阪に  
生る。

ンクの十五の唄は困難なものを問答體ですらりと譯してある。その手腕は茅野蕭々や與謝野鐵幹のよりも優れてゐる。幽玄高雅氏が特有のものがある。藻風は之を喩へて、「その色純白灰に淡紫の影を曳き、その響は秋濤の哀を偲ばせて、遙にトルフィンの歌を交へまた巡禮の旅に聴く遠寺の鐘のやう」だと評したやうに記憶する。

波斯學者の荒木茂が中央公論でツイゼラルドのオムマハヤムを出し、波斯の原文によりフ氏の譯を訂したことは前にも一言したが、之を流麗な詩に譯したのは竹友藻風のルバイヤットである。

この他英文學者で將た敬虔な基督教の信仰篤い齋藤勇はブラウニングのサウルを「聖書の研鑽」誌上に載せてゐたが、大正九年に單行本として出した。テニスとは全く反對の傾向を取り想に重きを置いてゐたこの豫言的詩人の特色を學術上からも説き、力より來るところの歡喜を十二分に詠つたサウルの文學的價値を説いて、忠實に原詩を譯した。これより先大正七年に帆足理一郎の出した人生詩人ブラ



ウニンの中には評論を主としてあるが、例の名高い『ビバは過ぎゆく』などと共にサウルの譯も載せてあるが、帆足氏のは柔く齋藤氏のは少し硬すぎる傾向がないでもない。齋藤氏は三木露風に傾倒し、同人と共に雑誌牧草を刊行したり、又キイツ亡後百年記念祭を行つてその記念號を出し、又その同人の選集牧神詩集を版に上した。

現今我が詩界に於ては民衆派以外の人々で一般に重きを置いてゐるのは佛國近世の詩人である。彼國では高踏派に反抗して起つて音楽と旋律と陰影を尊んだヴェルレエヌを始とし、それ以上に推し進めた夢と霧の詩人と云はれたマラルメ、それから古代藝術と近代精神とを結び付け、新しい思想で古代の詩を作るアンドレ、レニエ、また夢想の捉みがい陰影を描き、たゞ二三級で人を幻影に引入れるアンリ、ド、レニエ、秋と夕暮の詩人優婉な病的な倦怠の詩人など云はれたアルベール、サマン等種々な詩人が出てゐるからである。譯詩界の權威である上田敏は大正四年に詩集牧羊神を出さうと

してゐるが、校正半ばで重病に悩まされて他界した。門下の竹友藻風等がその後をうけ、大正九年十月に功を竣へた。その中にはマアテルリンクの思想と共通する所のある牧羊神以下五篇の創作も收めてあるが、他は佛白現代詩人の名作をうつしたもので、その人々はトリスタン・コルビエル、ジュウル・ラフォルグ、モリス・マアテルリンク、エミール・エルハアレン、フェルナングレグ、ポオル・フォル、ギイ・シアハル・フロオ、レミ・ド・グルモン等である。その譯は外形の複寫でなく本質の共鳴から成つたもので、氏はいつも翻譯は又一つの創作であるといふ見地から筆を執つた。海潮音には口語體はなかつたがこの集には大分それがある。「見送りましょとて濱まで出たが」の越後甚句を思はせるポオル、フォルの別離も、柳澤健が憎らしいほど快い諧調だと讃歎した兩替橋もこの中にある。今その數行を引く。

見渡せば入日華やぐボン、ヌウフ



橋の眼鏡の下をゆく濃い紫の水の色

みるに心が結ばれて——えい

かうまでも思ふのに、さても情ないマノンよ

恨む途端に、ごろ、ごろ、遠くで雷が鳴りだして

風の翻が蒸暑い

その他マアテルリングの『目つき』も創作以上のものゝやうな感じがする。氏のモニユマンは京都大學に將來出来るか否やは知らない、(鐵幹の云つたやうに、白氏文集が中古文學に影響した如く氏の海潮音は譯詩界に大な刺戟を與へた)海潮音と牧羊神は譯詩界のとこしへのモニユマンであるであらう。

去年は詩人の記念祭が多かつた。二月にキイツの百年祭が東大の山上御殿で開かれる、六月にはエルレインの二十五年祭が上野の精養軒で擧げられる、十一月にはポオドレルの百年祭が早大で行はれた。従つてそれら詩人の作品も多く讀まれたやうだ。中にエエルレ

インの集は大正八年に川路柳虹が譯出したものがまづ行はれ、昨年に至り竹友藻風が譯のエキルエヌ選集が祭典に間に合ふやうに出來た。美しい詞で譯されてある。ポオドレルのは九年三月に馬場陸夫の譯にかゝる惡の華と櫻澤如一の羅馬字で譯した惱みの花とが同時に出た。馬場氏のは惡の華より七十八篇散文詩より二十五篇を採り、スタームやサイマンズの英譯を参照して譯出したものであつて、はしがきにポオドレルを委しく紹介してある。信天翁や薄暮の曲など上田柳村の海潮音の譯と比べて見るに古典的と現代物とその對比が面白い。しかしどれだけ原詩をうつし出してあるかは十分の穿鑿を要するのである。惡魔派の詩が復興するかは問題であるが、戦後佛蘭西文學勃興の現象に外ならないのである。又ヴェルハレンのも名高い觸手ある都會は新城和一によつて一昨九年に譯出され、去年は高村光太郎の手によつて譯詩「明るい時は」成つた。いづれも佛語に堪能な人々の意をこめた上に成つたもので、原詩の風采を



傳へてゐる。

尙この方面に力を盡したのは堀内大學と柳澤健とである。柳澤氏はヴェルハーレン、モレアス、クロードル、ボードレール、フォール等を紹介したり、又最近には現代佛蘭西詩集を出し現代の詩宗たるアンリ・ド・レニエ、ポール・フォール二氏の詩草に故人となつたアルベール・サマンの詩章を加へ三人の精をぬき華をとつて譯出し、ジー・ワルクのレニエの詩評とヒール・ルイーのポール・フォール論、フランシス・ジャムのアルベール・サマンを思ふ最初の悲歌を譯してそへ、尙その下巻にグルモンやジャムやノアイユ夫人の詩を出さうとしてゐる。堀内大學は大正七年譯詩集昨日の花を出した。永井荷風は言葉と形とは異つてゐても心と調とはもとの詩にかはらないとその序に裏書をしてゐる。日夏歌之助は輓近詩壇の白眉であつたとも、特にグルモンが連篇田園詩シモオン十一章など新しい表現、自由の新調、柔軟な言葉づかひは口語によつても粗野でない詩を作り

得る好模範を與へたといふやうな評を下した。氏は更に大正九年の末に第二譯詩集失はれた寶玉を出した。この集にグルモンやフォールの外立體派を創めたアポリネールの詩を澤山に譯してある。その譯風も自づと新しいタイプに赴かうとしてゐる。前集は海外漂泊の身の寂寥を慰めようとする上から、自然に弱々しい婉やかな什が多かつたが、この集はその點から云つても趣を異にしてゐる。この頃出版になつた抒情小曲集にも譯詩を載せてゐる。昨年又譯詩サマン選集を出した。彼の詩が近時大に進境を示したやうに氏が次々に計畫してゐる譯詩集にも亦相當の光彩を添へるであらう。

この他露西亞文學の方では昇曙夢によつて大正九年にろしや民謡集が譯出され、同十年にはブーシキンが八年の歳月を重ねて作つた七千餘句から成つてゐる一大叙事詩オネーギンが岡上守道によつて譯出され、少し後れて米川正夫の同書の譯も亦版になつた。斯ういふ風に譯詩も漸次盛になつた。西洋の雜誌にも近來二三篇の詩の入つ



てないものはない程で、東西ともにその隆興期であるやうだ。

### 第六十章 女流作家

女流にては短歌に秀でたものはあるが長歌を善くするものは尠い。規模の大きい思想の複雑なものは感情の強い女性には幾らか適しない點もあるであらう。新詩社の人には三四その作者があつたが男子には比すべくもない。中で大塚楠緒子の『お百度詣』は優しい婦人の情がやさしく語はれてある。次に之を擧げる

ひさあし踏みて夫思ひ

ふたあし國を思へども

三足ふたゝび夫おもふ

女心に告ありや

奥謝野晶子。舊姓鳳。明治十一年堺市に生る。

天才歌人奥謝野晶子は夙く毒草の中にも三篇の詩を載せてゐる。三

十七年十月の明星に『君死に給ふことなかれ』の意氣の壯んな作を載せ、太陽記者の大町桂月は危険思想の發現だと論じ、相互及その周圍に大分問題を引き起したものである。併し御百度詣に比べては劣つた作品である。後巴里に於いて詠んだ作には可成面白いのものもある。種々のものを並べ立てた『五月の歌』もかはつてゐて、一息に讀ませる作であるが、白秋の思出であるものに似通ふ『初夏』の方が女史の俳をよくうつしたものであらう。大正三年に出した詩歌集夏より秋へ、及四年に出したさくら草、同五年に出した舞ころもなどの中にも、以上の詩や別の詩も交へて擧げてあるが、短歌の名噴々たるのに壓されて引立たぬ。舞ころもに收めた『第一の陣痛』の一篇の如きは優れた自由詩である。その一節を引いて見れば、

わたしは唯だ一人

天にも地にも只一人

じつと唇を噛みしめて



わたし自身の不可抗力を待ちませう  
生むこゝは現在

わたしの内から爆せる

唯た一つの眞實創造

もう是非の隙もない

のやうである。その睦じい友の茅野雅子も長く歌壇に立つてゐて、才藻ゆたかに、詩も時に作つてゐるが、さしたる特色もなく、晶子のエビゴオネンと見る人が多い。矢澤孝子は大正三年に初夏といふ詩集を出した。その他にあまり多くを聞かぬ。ところが大正八年頃に至り白蓮女史、米澤順子、澤ゆき子、高群逸枝、山口宇多子、深尾須磨子等の才媛が續々と現れて詩集を出したり、又誌上にその作を發表するに至つた。

白蓮女史は始め短歌で名を知られてゐたが、大正八年詩集几帳かけを出した。深窓の几帳のかけにひととなり、一時九州で語はれてゐ

た女史の思索し體驗した心胸を率直に詠じた作四十八篇と詩劇一篇とを収めてある。燃えるやうな強烈の愛を諳つた作が多く、表現もきはめて明るく、中に『吉祥寺』及『お染さん』などが代表作であらう。詩人的才氣に富んだ上流婦人が事によりて愛にもだえ、世を疑ひ、心を恣にし、蕩逸きはまりなき境地に陥り易き傾向も集中にありありと見える。「檻に飼はれしこの身ぞと書いて驚く身の」と『らくがき』の篇中にあるは不自然の結婚を咒つた句と見える。『異端者』には「我は身の脂に灯ともして獻燈す。邪惡の神のおん前に」と諳ひ、『蠟燭の灯』には「一つのらふそくの灯二つ三つ但しは百千、その光をうつしたとて元の灯の光は少しも失はれてはしない」を例として戀の心を百千の人に分けても、處女の愛は失せないことを諳つてゐる。詩は自己を描く肖像と見れば、作品としての生命はもつてゐるが、淪落してゆく心情を大膽に告白したれば理性を重んずる我等には新人の感想があぶなかく感じられることが多い。『おかくれになつた



『二位様』は現在を夢に過去のみに生きてゐる老子爵と、昔を夢に現在と未來に生きようとする新しい女史との心胸の對照がまさまさと見え、公卿の間に使はれた、おだい様おたゝ様、まろは、おとうにゆくなどの語もふさはしく讀まれる。詩劇『阿難尊者と摩登伽女』は戀と宗教との深き思想を熾烈に描いた大作である。

米澤順子。明治二十七年神田に生る。

米澤順子も同年詩集聖水盤を出した。白蓮よりも夙く詩作を始めて大正三年頃よりの什五十一篇を抽いてある。言語の洗煉に努めた跡が見える。三木露風の早い時代を髣髴させるやうな象徴詩風のものが多い。いづれも措辭が整つてゐる夢のやうな氣分を多く謡つてゐるが、白蓮と異なり熱烈な情緒の奔放はない。『釧』や『歡喜の浴槽』などがその代表作であらう。近時雜誌に發表してゐるのは現代語を用ひてゐる。茲には歡喜の浴槽の上節を引く。

偉なるものの頂點にありて  
陽ひまきは輝けるまき

晶玉のごま透きまほれる

歡喜の浴槽に浸れば

なめらかに

ましろに

心ゆくまで弛びし現なき肌の色

澤ゆき子は大正十年詩集孤獨の愛を出した。同名の篇以下雨の唄まで六十三篇を収めてあるが、孤獨の心に湧く哀傷と苦惱を謡つてゐる。言葉は徐に流れる水の如く女性の情調がしみじみと表はれてゐる。不眠の床の一節を擧げて見る。

夢は弱々しくのび

うちしのべる肉體の香に強く泌む

あこがれの思を散らせし我れごこの上

なれやすき心の如くしづかに

冬は近より来る

澤ゆき子。明治二十七年に生る



川路柳虹はその序に「その詩は尤なだらかな感情の波にのつて、夢のやうな月光の下に嘯啼する噴泉のやうな、微妙な韻律と色調とをもつてゐる」と評してゐる。但し近く日本詩人に載せた『もう秋がきたのだ』の篇の如きは想の上から見ると稍く變化を來しかけたではあるまいかと思はれる。魅性はあるがデカダンのな棄鉢に人生を見た感じがするやうだ。今後の作風はどうなるであらう。

高群逸枝。明治二十七年熊本に生る。

高群逸枝は何だか彗星的な女詩人のやうに思はれる。その短歌は柳澤健に紹介され、その長詩は大正拾年四月の新小説に生田長江の紹介によつて發表され、やがて同六月單行本として詩集「日月の上」に出た。この長編詩は自家の數奇な經歷を語つてあるやうだ。天惠多き有明海の瀬の村に生れた少女は夙く性の芽生えがさどく、種々の誘惑にも出遭つた中、多くの新しいものを讀み、圖抜けた天賦の虚榮心は漫曼的の境域から杳かに脱して、別の世界にあこがれてゐるやうだ。十二の春、家を出で寺にゆき尼にならうとしたり、學校

では舍監に容れられなくて出されたり、工女になつたり、教員になつたり、四國巡禮に出掛けたり、二十歳に滿たない身で種々の境遇を経て來た作者は、世の平凡を嫌ひ、社會に反抗的態度で唯美の世界に籠つて、その王とならうとしてゐる。「おお世の中よ、お前は餘程落ちついてゐる」といひ、「どこまで行つても平凡な世の中だ」と歎き、「勞働が神聖だ？馬鹿なことを人は云ひたがる」と誹り、「妾は明日は願はない」と自ら語り、「平凡よ、翼をやる、行つて呉れ！」と宣べ、「ゴルゴン頭の鬼共が妾の自由を石にする」と身の辛らさを啣ち、「だから御いつしように、歩きませう、唯美派に屬するものの上を」と希望を述べたりしてゐる。幼時の追憶農村や工場の近代的生活にも觸れてゐる。讀過して異常の點が人を引きつけるが、あまりに高く止まつて、人も世も何とも思つてゐない大膽に驚かされる。生田氏の推薦があまりに高かつたので第二の島田清次郎など評するものが多い。この長篇は感情の統一が出來てゐないのは欠點であら



う。扉に「汝洪水の上に坐す、神エホバ、吾日月の上に坐す詩人逸枝」と自ら題してゐるのが、癡だと謂つてゐるものも少くない。柳澤氏の言を借りて云へば先天的にボードレルの耽美の理論とマラルメの象徴の理論とが判つてゐる二十歳に充たぬ村の少女が出たことは一つの奇蹟に値するかも知れぬ。

この集と同月に第二詩集放浪者の詩を出した。『死の愛』以下長詩二十五篇、短歌連作五篇、短歌若干を収めてある。夢見がちで神話の天使を氣取つてゐて、又一方では生活のどん底をさまよつてゐる放浪者のやうな若い女は幾多の矛盾はあるが、思ふ存分自由に大膽に語つてゐる。現代の宗教を疑ひ政治を呪ひ、デカダンの戀を語り、孤獨の寂寥に泣いてゐる。『漂遊吟』には「人々よ、人生が妾に何だらう、いや何でもない」といひ、「そして人々の愚かを下らない信條を妾の神話で鍍金して上げよう」と語り、『少女行』には「人よ美の物尺で度つてお呉れ、やくざなお前の道徳で、どうして妾の事が分るも

のか」と云つてゐる。山の彼方に平和な愛の世界を望んでゐるが、それは徹底的のものでなく浮世の溷濁は一面には多分に染みついてゐる。『ダンメンチオ氏に呈す』には「日出づる國の少女、黄金の哄笑をもて、君を愛す」と大きく出てゐる。『朝鮮の同胞に呈す』には歴史に囚はれて獨立運動に齟齬する誤を説き、人類の平和と幸福を望むべきことを述べ、「わが愛する友よ君が賢き命と名譽とを君が古き日の命と名譽との爲に過ちたまふ勿れ」といつてゐる。『三人の女』には裸體の人と美の女と冥想の女とを設けて、その奉じてゐる所を主張させ、冥想の女には人類の理想を高唱させ、美の女には現在の愛の満足を土臺として行爲させ、裸體の女は無意味な巨人のやうに黙してゐる。謂うに冥想の女は氏の目的で美の女は氏の實生活であらう。『従姉に與ふ』には天刑病の血を引くことを惡どく語りつてゐる。集中で『湖畔の老媪』などが面白い。集を読むとき時々破天荒のやうなことを語りつてあるかと思つて見ると忽ち勢のぬけたがっかりしたり、人類と



が世界とかの大きなことを云ふかと思つと郷國のお母さんが戀しく妹が懐しくなる。堂々とましく立って説いてゐるかと思つと勢のない氣の抜けたビールのやうな調子がある。『背徳の輩が、澤山歩いてゐる、政治といふ屋臺車をああして引つ張つて歩いてゐる』と云つてゐるその次には「高い岩壁の下では大僧正が餅を食べてゐる、その附近は既に春で、民家は蓮戸に蔽はれてゐる」と諷つてゐる。兎に角空想の熾な自信の強い詩人である。精神上の統一が出来ていつたら偉きな未來があるかと思はれるが、今のところではエツキスである。

山口宇多子。明治三十二年に生る。

柳澤健氏によつて紹介された山口宇多子はヴェルハーレンの詩を愛し、密に六七年前より詩作に凝つてゐたといふ。まだ集を見ないし、雑誌に發表されたものも少いから、兎角のこととも謂はれないが、柳澤健氏は『晴れ行く朝』の篇はノアイユ伯爵夫人の健康を思ひ出させ、その發想法はアルチュール、ラムボオのあの熾なさまを想ひ出

させるといひ、又『朝』の詩をあげて、女性にありがちの感傷的情緒、繊弱な感性、柔軟な情趣などいふものから杳に離れて、夏の人間的な歩みの正しさを示して」云々と評してゐる。誌上に散見してゐる諸篇を見れば、女性ながら千家元麿の詩に見るやうに若々しさが流れてゐるやうだ。

深尾須磨子。明治二十四年兵庫縣に生る。

與謝野晶子夫人によつて廣く世に紹介された深尾須磨子は望多き詩人である。良人の記念の集天の鍵の附録(否合集)として載せた詩五十四篇殆ど屑かない。熱情の燃えるやうな、矢繼早の急迫なリズムは人を知らず知らずその方を引張つてゆく。そうして平明な詞は作者の言はうとする所を十二分に盡してゐる。相愛の夫に先きだゝれた悲しみや、生前の追憶や哀慕は頗る人の同情を惹く。明星所載の『心の獨語』などその代表作の一つであらう。その一節を引く

おお何だか音がする  
あれは錠の軋る音だ



あれあれ

私の部屋の鍵番が

錠をはづして

死や道徳や傳統を

迎へ入れてゐるやうだ

おお私ばもうたまらない

の如く焦燥の気分がリズムと一致してゐる。女流文

いかなる巾幗詩人が輩出するかは先輩諸女史の責任も少くはあるまいと思はれる。

### 第六十一章 民 謠

民謠は輒近に至り漸く盛にならうとしてゐる。顧るに文部省が各府縣に移牒して古來行はれてゐる民謠の蒐集を依頼したのは明治三十

八年の事であつた。當時學者や詩人がこれが蒐集や研究に關し種々説を述べたもので、中にも志田素琴は帝國文學に日本民謠概論を載せ、また白百合に日本詩學上に於ける民謠の位置を論じ、櫻井天壇は獨逸及スラブの民謠を紹介し、岩野泡鳴はそのリズムを考究した。又四十年に至り白百合は民謠號を出し、その經營者の前田林外は日本民謠全集を編んだ。斯ういふ狀況で民謠の聲は高まつて來た。併し民謠作者として立たうといふ人は勿論なかつた。その以前に於て詩人や學者が古調に倣つて試みた佳作は一篇や二篇はないのではなかつた。横瀬夜雨の『お才』の如き、高安月郊の『花賣』の如き、上田萬年の『花』や『學者』の如き、齋藤綠雨の『烏』の如き、拾つて見たならば幾らかはあらうが、さう多くはなかつたがこの頃に至り野口雨情、平井晚村、少し後れて福田夕咲、人見東明等が澤山の民謠又は民謠調の詩を作り出した。雨情の四十年に出した詩集朝花夜花はその傾向の著しいものである。雨情は地方色をよくあらはす點



に於ては他の追隨をゆるさないと謂はれてゐる。夕咲のは四十五年に出した詩集春の夢にもその臭のする江戸趣味の作が多い。晩村のは大正四年に出した野葡萄の中に二十七篇のひな唄を収めてある。夕咲のは三味線に合ふやうな頽唐的な風で晩村のはもの哀しい追分節のやうな調である。

民謡調をよく融和して成効したのは北原白秋である。氏が四十五年に出したおもひ出の中には澤山の面白い民謡がある。民謡が郷土の臭を要とすることは今説くまでもないが、白秋のは南國の水郷の色がよく現れてゐる。雨情はその郷土の常陸地方の地方色を出すことに専念してゐるが、之をもの淋しい北國の追分節とすれば白秋のはあやめ咲く花やかな磯節の趣があると云へよう。雨情の「中仙道は山の國常陸鹿島は海の國」と白秋の「空に眞赤な雲の色瓶に眞赤な酒の色」と並べて見たならばその差がよく分る。

童謡と共に民謡の作家が多く出だしたのは一昨年九月頃からであら

う。そうしてその中心は雨情氏である。氏は大正九年六月田園と都會を出し、十年二月民謡集別後を出し、生田春月の編んだ古い時代からの日本民謡集、野口雨情霜田史光の共編の日本民謡作集も出た。藤澤衛彦の古謡民謡地謡を収めたる小唄も出版された。又神田青年會館で全國民謡大會を開き追分節磯節相馬節木曾節おはら節等數番の演奏があつた。東京高等師範學校で童謡民謡演奏會を開いたりした。斯の如き新古の民謡の實地演奏會について、その作法に關する書も出で、新聞雜誌にても民謡に關する論評も散見するやうになつた。中にも西條八十のチェツク、スローバツク族やアイルランドの民謡によつて民謡精神と民族性の關係を説いたかなりや誌上の評論の如き見るべきものもある。雨情氏は音調に重きを置いてゐることは童謡と同じ考のやうだ。「調子にとらはれるといふことはいいこととは思はれませんが、調子を無視することはそれ以上わるいことです」とも「近頃は内容を自由にする爲に言葉の調子にとられず讀む



童謡があつて欲しいといふ人もありますが、童謡である以上そんな必要は少しもない筈です」と云つてゐる。民謡は童謡以上である。然るに之に對し民謡と民衆詩と握手させようと望んでゐるのは白鳥省吾である。氏は曲譜によつて歌ふものに限らず國民の愛誦詩篇は即ち民謡としたいといふ見地から、「新しい民謡はもはや戀歌や漠然たる生活歌をその内容とするに満足すまい。新しき時代の人と人との關係や社會問題に對する批判や絶叫を取り入れて差支ない。消極的な生活の悦樂からもつと積極的な生活の追求にまで動き出さなくてはならない。その調子の如きも單に吟誦に適する七五、五七等を基調とせるものをのみ求めない、もつと自由なものであり、場合によつては口ずさむに不便なものをも民謡と呼ぶに差支はあるまいと思ふ」と論じてゐる。民謡が舊來より一轉化しなければなるまいが、そこまで進み得られるかは尙將來の問題である。管見によればもしさうなると民謡でなくなるかも知らぬ。その譯は、民謡が本來單純

化した素朴なりヅミカルの性質なものであるから、郷土の色に時代の匂を加味するは結構であるが、口ずさむに不都合なものとなるとその性質が他のものとなるではあるまいか。若い詩人の藤森秀夫は獨逸の民謡に基いたのか素朴な力づよい表現を用ひた民詩謡を作つてゐるが民謡作家として立つには至らない。兎にも角にも手腕ある作家の出られるのを望むのである。

## 第六十二章 小 曲

自由詩が熾になつてから、想は豊富になつて來たが、詞の洗煉は顧みられない作が殖えて來た。端的な感情を冗漫にかき下す風も増したやうだ。従つて詞藻を味つて來た人々からは非藝術的のものとして注意を拂はなくなつた。又形式の不整で傳統的の約束を無視したところから一般民衆から詩が遠ざかつた觀もないではない。そこで



三四年來民謡が盛に行はれるやうになつた。併し一般の詩人はその作品から純抒情の小曲を集めて公にする風も近來大に盛になつた。大正七年七月の短歌雑誌は抒情小曲集と題して三木露風、川路柳虹、柳澤健、室生犀星、白鳥省吾、日夏耿之助の小曲を輯めて掲載してから、二ヶ月して犀星の抒情小曲集が出、八年六月には柳虹のはつ戀が出で、同八月には白秋小唄集が立派な装釘して出た。それから九年十年にかけては數多の小曲集が現れた。白秋のわすれな草、白鳥の幻の日に、春月のハイネ小曲集、西條の靜かなる眉、露風の生と戀などは九年の出版物で、正富汪洋の戀愛小曲集、藤森秀夫の小唄集フリヂヤ、柳虹の芦の笛等は同十年の出版である。一體小曲は白秋のおもひでのやうに青年時代に於ける喜や悲を主として歌つたものが多く、又その時代の回顧や追懷を謡つてあるが普通である。そうしてその行き方は人によつて必ずしも同一でない。白秋のは民謡を基調として、これに技巧も加つた口吟してもしなやか一般民衆の

好む作品が多く、九州地方の酒屋男の生活を歌つた新しい調子の民謡めいた酒の穢の諸篇や、豆相あたりの舟唄として作つた面白い城ヶ島の雨や、葛飾の農民の爲に作つた秋の鄙歌や、舞踊に合せて謡ふ槍持の歌や、劇場の小唄として作つたさすらひの唄、カルメンの唄等も含んでゐるが、純民謡として成功した作が少くない。

「白秋の民謡は技巧に傾いて本當の人間の聲が聞かれない傾がある」と春月が評したが、新しい着物で古い民謡を包んだ作もないではな

い。柳虹のは西條八十の評にあるやうに、日本傳統の歌曲に於ける絶え入るやうな細長いリズムや、吟じてみて縷の如き餘韻嫺々たる響はないが、一語一語に太く短くリズムの少し流れては踊き、また潑刺と弾返つて進んでゆく趣がある。その傑作は

足もこの薔薇を踏んでもうばの空

縫針に手を刺されてもうばの空



石に置き且走る、君を思つてうはの空

の一篇である集中の初戀十章も氣のきいた心地のよい作である。或人は氏の作は小手がきゝすぎるといふ人もあるが美しい作が多い。白鳥省吾のはその主張のやうに土の臭ひと時代の香とがある。『地平の嗟嘆』とか、『自由』とか、『不遇』とか、『賃銀』とか、『焦點』とか、『夜の懺悔』のやうな新しい題を諷つてある。それだけ生硬の嫌があり、又説明的な表現が多い。春月のは純な感情を女の如く甘やかに諷つてゐる。西條のは傳統的の民謡には遠く、その想の捉へ方や表現の法が歐洲近代的の傾向を帯びてゐる『指』でも『タイピストの嘆き』の如きはその著しい例である。氏の靜かなる眉の中には童謡も交へてゐる。霜田史光は民謡の價値を論ずる中に、民謡は國土を離れては價値の存在しないといふ點から二氏の作を評して、春月氏の小唄なぞは民謡とは云はれない。あれは氏の心酔してゐるハイネの模倣であつて、獨逸に行つては民謡と云はれるかも知れないが、日本にて

は民謡としては認める譯にはいかない。氏には土の匂がないのである。西條八十氏のものなどは一寸見ると随分バタ臭いものやうであるが、その言葉のうちには可成土の匂を持つてゐる」と評した。そ星のは言葉は無雜作に使つてあるやうだか感情は純な方である。犀の中では『海濱獨唱』などが代表作であらう。百田宗治の新月には單純平明な篇が多い。

抒情小曲といふ中には言語や形式に多少傳統的の制約を受けてゐるものと否らざるものとの差があつて、前者を小唄と名づけ、後者を小曲小詩などと區分してゐる人もあるが、之等は打つて一丸となすべきではあるまいか、又民謡は今や一轉化の時に方つてゐる。小曲小詩はなるべくリヅミカルにし、對話の形式を無暗に用ふるを避け、民謡はその範圍を押し廣げて互に歩みよることは斯界の爲に必要ならざるか、世の識者に正したいと思ふのである。



## 第六十三章 童謡の隆盛

少年の爲に夙く詩を書いてゐた人々には竹内夢二や星野水裏などがあつて、水裏は濱千鳥(明治四十四年)や宵のあかりや赤い椿(大正六年)を出し、夢二は面白い畫を挿んだどんたく(大正二年)やねむの木(大正五年)等を出してゐたが、童謡を生むには至らなかつた。大正七年から八年にかけてお伽文庫・お伽文學・世界童話集・日本お伽断・家庭お伽話等の叢書は各書肆が競つて出したもので、少年の爲の讀物の非常に盛になつたことは空前と云つて宜しからう。ところが詩の興隆につれて童謡が芽を吹いて來た。一昨年の四月より童謡中心の幼年雑誌の多く出たことはこれも我邦では實に空前といつて差支なからう。鈴木三重吉の主幹してゐる少年雑誌赤い鳥がこの童謡興起の中心となり、金の船でもその他の少年雑誌や繪本の類に至るまで

之を挿むやうになつたことや、北原白秋、野口雨情、西條八十を始めその他の詩人が童謡の作に筆を染めたことは、この運動上見逃してはならないことであらう。

白秋は童謡集トンボの眼玉(大正九年二月)や兎の電報(大正十年五月)を出し、雨情は田園と都會(大正九年五月)や十五夜お月さん(大正十年二月)等を出し、又一昨年九月には東京童話會を組織した。八十は童謡集鸚鵡と時計を著し、昨年十月童謡中心の雑誌かなりやを創め、六月の大觀に童謡私見を掲げ、英國詩壇の童謡作家を紹介し、又西川勉と共に日本童謡選集を出し、三十餘家の作品を蒐めた。昨年はこの他葛原蘭の小猫の鈴、白鳥省吾の雲雀の巢、三木露風の眞珠鳥、加藤まさをの合歡の搖籃等一々數へられない程出版された。斯くて一方では雨情の指揮のもとに童謡辭典も出來、童謡作方問答の類の書も成り、一方では譜を作つて誦ふことも熾になり、權威ある作は蓄音機にとつたり、詩人と音楽家と教育家が手を聯ねて、或は



童謡民謡の演奏會を開いたり、又童謡講習會を起したりするので、職業詩人ばかりでなく、生れながらの詩人である子供の作も澤山に出で、最近には全國兒童傑作童謡一千選の如き書も出版されるに至つた。

土田杏村であつたか、童謡を見る毎に私はいつも君の生活も貧弱なものだ。こればかりの思想しか持たないかと云ひたくなると、第二義的な作家を蔑んだのは別として、大家と許される人の作ではそれぞれ向ふところが違ふ。雨情のは地方色がよくあらはれてゐて天下一品のやうに云はれてゐるが、民謡から入つた爲か、子供にとつては、淋しい所や、幾分諷刺の分子の多過ぎる點があるやうに思はれる。彼の十五夜のお月さんの

十五夜のお月さん

ごきげんさん

婆やお暇さりました」

十五夜のお月さん

妹は

田舎へ貰はれてゆきました」

十五夜のお月さん

母かあさんに

も一度私をあひたいな

第三篇でも淋しい感がある。白秋のは民謡の調子がよくうつされてある點に敬服する。そうして始終子供の氣分になるといふことに集慮してゐる。ぼつぽのお家の如き可憐のものも多いが、思出時代のやうな情調で想像の豊かな作もある。『青い月夜』の如きはその例であらう。八十のはケルチツクな想像力をもつた氏のこととて、子供の心にびつたり合はない作もあらうが、想像の貴い作がある。カナリやの一篇に

唄を忘れたかなりやは



## 象牙の船に録の權

月夜の海に浮べれば

忘れた明をおもひだす

の如きは之を證する。併しこれらの人々は個性が遠ふばかりでなく、童謡を作する態度が異つてゐるのである。雨情は「郷土藝術たる童謡を發達させ鼓吹するには、郷土の言葉をそのまま取入れなくてはならない。童謡を作る時には、すべての事を忘れて、アイウエオ五十音で、麥も林檎も茱萸も産れる土の色をみて作らなくてはならない」と講演したと聞いてゐるが、氏の作はこの趣旨から出てゐる。吾人は氏が民謡と童謡とを混じてゐる傾のなきかを疑ふのである。鈴木三重吉が素裸な子供の心を直接にうつさうとしたものを心掛けて居ると云ひ、又子供に復ることであるといつてゐる。その上半は白秋の態度で、後半は白鳥その他の人々の態度である。詩に徹する道に「詩人は心の郷土として屢々幼時追懐すると共に、子供の仲間

入りして歌ふ。それは少しも不自然なことでない」といひ、「童謡の境地は細かい幻想風のものばかりでなく、飽くまでも自由で快活で現實的であることを私は求める」と云つてゐる。その作を見ると子供に親しいものはあるが、随つて平凡な作が多い。西條は純藝術的な童謡を希圖し、その製作に必要な第一條件として、「小兒の感覺の復歸ではなくて、小兒の精神と吾々成人の精神との間に類似の發見にある」と云つてゐる。この抱負が鸚鵡と時計に現れて、その缺點をいへば子供に遠いものに成り易い。島木赤彦も子供になれといふ童謡論者は畢竟大人に子供の物眞似をせよといふ人々である。良寛上人が老いて動作子供に類したけれども、子供になつたのだと思ふは間違ふ。大人が童謡を作すといふのは、何處までも大人が子供と交通することである。大人は大人の愛を突きつめて子供と交通してゐればいい。大人の作する童謡は大人と子供の同情の融合から生れると私は思ふといつてゐる。一體我が童謡は極めて古くからあつた



か、それは諷刺的のもので今日の童謡とは趣が變つてゐる。然るに今の童謡作者には殊更に諷刺的な作を好むものが多いのは、どういふものであらう。例へば齋藤正雄の『爺さん鍛冶や』の如きは、想も調も面白い作であらうが、一面から見れば、

あの鍛冶やの爺さんは

朝は早うから

トツチン、カツチン、トツチンカン

春がゆくごとく轡のうへに

花が散つても

トツチン、カツチン、トツチンカン

よくよく聞いたら啞つんぼ

いつもだまつて

トツチン、カツチン、トツチンカン

の末節が善良な子供の本性に背きはすまいか。意外な滑稽を諷つた

といふよりも、皮肉をいつてゐるやうにも見える。兎に角我が童謡はいま稍く盛なうとする第一期であるから、種々な作の出るのを望むが、童謡作者は児童心理を研究して、廣い世界に於けるのびのびした逍遙、未知の世界に對するあこがれ、不可解に對する驚異、一切の物に對する深い同情、卒爾に起る歡喜、瑣末な事に感ずる懊惱など、その想と場合に應じた音律的な表現の作を出されることを庶幾して止まないものである。

### 第六十四章 最近の人々の集ま天の鍵

兩三年前より詩壇の隆盛につれて詩集の公にされたものが極めて多く、皆それぞれに特色を有し、實に百花繚亂の觀がある。然れども時流に抜いて自家の肖像を大きく描き出したものは少い。従つて一集として讀過の際には面白く感じたものであつても、この書には之



を録しないものも多くある。例へば與謝野鐵幹子が「げに君が詩の言葉はろざりよの珠一つ一つに奇しき句を放ちて光り、その聲は低くして夢の如く」云々と評した竹友藻風の時の流れの如きも、その私淑してゐる上田柳村の遺響を聞くが如く感じたので、之を説かない。日夏耿之助が推賞された堀内大學の水の面に書きての如きも、苦行僧が大地の苦惱を去つて天上に憧れるさまに喩へた椰子の木の名篇を始め注目すべき作品を含んでゐて、未來に囑望されるが、まだその肖像がはつきりと映じてゐない感じがあつたので姑く之も章を立てなかつた。それらは他日版を改める際に方つて加除したいと思つてゐる。こゝに唯最近の詩集として深尾賀之丞の天の鍵を擧げて置く。

深尾の詩名の始めて聞えたのは大正七年のことで、東京日々新聞社が賞を懸けて國詩を募集した時その選に上つてからである。「壁に畫きての一篇は若い詩人の才藻を發揮したもので、想を永く埋没して

ゐたボンベイの壁畫に得、自ら壁上に繪いて會心の出来ばえに喜んでゐた一畫家が、忽にして自家の技は未だ傳統の森に生きてゐるのに心づき、急に心裡の寂しさを感じ、人間につきものの假面を去つて至上の藝術境に自適したいことを謡つた佳篇である。氏が傳統の外に立たうとする意氣はこの詩に現れてゐる。京都の工科大学を出て音楽趣味に深かつた氏自身の経歴も矢張新しいところがある。近時樂界で喧しいスクリアピンの傳も翻譯してゐたといふ。音楽で詩を表さうとした私は、詩で音楽を表すことによつて終らねばならぬと云つて歿したヴィータンの後に跟きて、その仕事を繼續しようとし、彼が東よりトンネルを掘つたから自分は西からトンネルを掘らうといふ見地で詩作してゐたが、大正九年世を辭した。須磨子夫人の手によつて出された遺稿は即天の鍵である。

氏は虚偽を厭ふことが甚だしく、似非道德家たらんよりは寧ろサテイルたることを希つてゐたさうで、『狎れ過ぎた言葉』の中には、神



に對つて「あなたの傑作の一つである人間の首から、赤錆びの道德の環を外さうとはなされませぬ」と窮問してゐる。「人間の灯」の篇には

誰だ―其處に潜んでゐるのは

俺の胸の燭臺に

灯を點さうとするのは

俺は人間の灯は嫌ひだ、

俺の胸には人間の灯は點かない

點さうさしてもだめだ。

と諷つてゐる。此のやうに傳統を離れ世間に超越しようとした精神は各篇に悉くにじみ出てゐる。或夏の幻想を諷つた『物言はぬ女』等の諸作に就きて、氏が幻想に富んでゐた人であることが了せられる。氏の翼つてゐた音楽と詩との融合した詠み方の作はまだ完成しなかつたが、『瓦斯瓶の半音階』を始め、京極の蠶の印象を諷つた『私

の耳に響く音楽』並に『或るアダジオ』等はその試みの作であると考へられる。異つた題材を諷つたものには『デーマスとホバス』がある。長篇『無題』には生死の境をよく諷つてある。氏にして早世することがなかつたなら、新しい或物をもつと提供してくれたであらうと惜しまれる。鷗外博士がその序に「天のかぎを読めば病後に白粥を啜つてゐるものが、コニヤツクやキスキイに唇を潤すやうな氣がする」といひ、「老來理性にかつたものに反情を起さしめるところが作者の力である」と云つてゐる。その詩風一斑が察しられる。

### 第六十五章 未來派

奇を好み新を喜ぶは人情の常である。輓近繪畫に未來派や立體派が起つたが、詩界にも之に倣つて、佛のマリネツチは未來派の詩を創め、やがてアポリネールが歐洲大戰の前後にかけて立體派の詩を唱



へた。そうして或るものは荒々しい感情を強調して諷つたり、或は奇異な表現を用ひたり、奇妙な印刷法を以てしたり、世人を驚倒するやうに努めてゐるらしく見える。その派の人々には相應に主張があるであらうが、それらの作品は門外漢には作意が明瞭に領會せられないのが普通である。破壊を事とするタダイズムが大戦の終末に近づいた頃から佛國に起り、その代表的詩人のポール、モランが出で獨逸にてはこれによりてゲアルグ、カイゼルの如き表現派の大家が出て、ひたすら自己を否定する印象派に反對し、力強く自己を肯定する文學を出し、露國にてはダダ主義の繪畫は戦時中に道路展覽を始め、その文學はプロレタリアと結合し、その運動の隆盛を想はしめるものがある。その他若い詩人や若い畫家によつて色々と新しいことを企劃してゐるものがあるやうだ。我が國にも近時表現派を紹介したり、第四階級の文學を論ずるものが大分出て來たが、詩作の上にては民衆詩が盛になつて來た。尙その他に若い詩人平戸廉

吉によつて日本未來派運動が宣言され新しい試みの詩が數篇日本詩人誌上に發表された。その宣言の中には神の專占物はすべて人間の腕に征服され、人間性の中心能動は集合生活の核心から發する、都會はモートルである、未來詩人は多くの文明機關を謳ふ。これ等は潜在する未來發動の内延に直入してより機械的な速かな意志に徹し我等の不斷の創造を刺戟し速度と光明と熱と力を媒介するなど云つてゐる。而してこの派の首唱者マリネツチに倣つて、擬聲語、數學的記號、あらゆる有機的方法を採用して、眞諦のクリエーションに参加し、出來るだけ從來の文章論や句法のコンヴェンションを破壊し、殊に形容詞副詞の死體を拂ひ、動詞の不定法を用ひ、何事にも侵されない域に進まうと企圖してゐる。

氏は一九二一年に於ける我新詩運動の四種の展開と題して、第一に時間的未來派の詩を擧げ、無暗に擬聲語や記號を入れたり、大小形を異にする同字を幾つも重ねた、副詞などをぬきにした、變な作(願



具)を出し、第二に空間的立體詩を擧げ(飛鳥及魚) 第三に第四側面の詩を擧げてゐる。第四側面の詩といふのは未來派に立體派の加はつたもので、タダイズムであり、表現派のものであるとしてゐる。第四に後期表現派又はアナロジズムの詩を擧げてゐる。これは寫象派と表現派との合致したものである。それらの作品が果してその主張に叶つてゐるかは問題であるが、兎に角新しい試である。斯ういふ新傾向の生ずるのは畢竟するに近代人はその現さうとする想が極めて複雑なるに、之を示す文字の力が乏しいところから、新工夫を凝し、それにそれぞれの主張を定め、舊形式を壊してこれに代らしめやうとするのである。イマジズムは繪畫に於ける後期印象派に移る道程の如く、事物を事物と見る自然派に飽きたらぬので、イマジ即ち想像を以て客觀を複化するにあれども、あまりに現實に印しすぎる弊があるので、内在精神のカーネーションを主とする表現派が起つたのである。併し表現派もあまりに超自然的である。

一體自己の内在本もそればかりでは存在の價値がない。他の實在と結合してこそ價が認めらるべきである。そこで獨逸のワレンシュタイン評傳を書いて名高いリカルダ、フーフ女史は文化生活を以て寫象表現兩主義を結合させようと説いた。彼國ではやがて來るべき新表現主義となるであらう。平戸氏がアナロジズムは古い抒情詩が遂行することの出來なかつた内と外との平行線的關係によつて結合させるを要とした。併しこれらは將來如何になるかは未決の問題である。恐らくは我邦にはあまり發達の見込がないものではあるまいか。後考を俟つのである。

## 日本新詩史尾



年表

△歌集 ◎雜誌又は文學書  
 ×評論又は新壇に關する事項

明治十五年八月	外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎合著新體詩鈔〔丸屋善七發行〕
明治十五年	竹内節編新體詩歌第一集第二集
同 十六年	同 第三集第四集
同 十八年	同 第五集
同 二月	湯淺半月著十二の石塚〔同人發行〕
同 十九年四月	竹内節編新體詩歌全集〔鶴聲社〕
同 九月	竹内隆信纂評新體詩選〔和田篤太郎〕
同 二十年四月	佐藤雄治編明治新體詩歌選〔津田氏〕
同	山田美妙、尾崎紅葉丸岡九華合著新體詩選
同	落合直文の孝女白菊の歌〔東洋學藝雜誌〕

年表



- 同 二十二年一月 大和田建樹著いさり火〔中央堂〕
- 同 四月 北村透谷の楚囚の詩成る
- 同 八月 SSSの於面影 (國民之友)
- 同 池袋清風の新體詩批評 (國民之友)
- 同 二十三年二月 石橋忍月の祖國歌成る
- 同 六月 〇宮崎湖處子の歸省出づ〔民友社〕
- 同 〇元良勇次郎のリズムと文學 (哲學會雜誌)
- 同 十月ヨリ 〇山田美妙の日本韻文論 (國民之友)
- 同 十二月マデ 〇山田美妙の日本韻文論 (國民之友)
- 同 十二月 〇大西操山の詩歌論一斑 (日本評論)
- 同 同廿四年一月ヨリ 〇山田美妙の日本韻文論 (前年の續)
- 同 一月 〇K U氏の詩辨美妙氏に與ふ (國民之友)
- 同 五月 北村透谷の蓬萊曲〔養心堂〕
- 同 八月 山田美妙著新調韻文青年唱歌集〔博文館〕

- 同 二十五年一月 中西梅花著新體梅花詩集〔博文館〕
- 同 〇池袋清風の古代和歌史 (國民之友)
- 同 六月 〇芳賀矢一の日本韻文の形骸に就て (哲學會雜誌)
- 同 〇大西操山の詩歌論 (青年文學)
- 同 〇旗野櫻坪の俗歌韻話 (早稻田文學)
- 同 〇旗野櫻坪の無韻非歌論〔早稻田文學〕
- 同 〇米國詩人ホイットマン逝く
- 同 〇夏目漱石の文壇に於ける平等主義の代表者ウオルト、ホイットマンの詩について (哲學會雜誌)
- 同 〇英國詩人、エドキン・アーノルド來朝
- 同 〇戸川殘花の朝の歌 (日本評論)
- 同 〇落合直文の淺香社成る
- 同 二十六年一月 〇星野天知等文學界を出す
- 同 〇井上哲次郎の詩歌改良の方針 (國民之友)



- 同 民友社十二文豪發行を企つ
- 同 湯淺半月の天地初發の詩 (國民之友)
- 同 一月 湯谷紫苑の譯詩キリアム、テル (女學雜誌)
- 同 一月二月 ×大西操山の國詩の形式に就て (早稻田文學)
- 同 三月 大和田建樹の新體詩學 [博文館]
- 同 四月 河添樵霞の韻文組立法 [清水書房]
- 同 十月 ◎宮崎湖處子著ヲルズオルス [民友社]
- 同 十一月 矢矧佐一編湖處子詩集
- ◎高木伊作著ゲーテ [民友社]
- 戸川殘花の桂川吊歌 (文學界)
- 島崎藤村の朱門のうれひ (文學界)
- 同 琵琶法師 (文學界)
- ◎大和田建樹著明治文學史 [博文館]
- 同 輯譯歐米名家詩集上 [博文館]

- 同 三月 同 中下 [博文館]
- 同 鹽井雨江譯湖上の美人 [開新堂]
- 同 五月 ×北谷透谷死す
- ◎透谷集出づ
- 同 四月 ◎北村門太郎著エマルソン [民友社]
- 同 十月 佐々木信綱編征清歌集 [博文館]
- 同 十二月 岩野泡鳴の劇詩魂迷月中乃 (女學雜誌)
- 同 人の諷詩石切の一篇世の批難を受く
- 齋藤綠雨の新體詩見本 (讀賣)
- 同 二十八年一月 ◎雜誌帝國文學生る
- ◎雜誌太陽生る
- 同 一月 ×幽微子(上田敏)の白耳義文學の紹介 (帝國文學)
- 同 一月 鹽井雨江の深山美人 (帝國文學)
- 同 武島羽衣の小夜砧 (帝國文學)



- 同 四月 ×上田敏、希臘思潮を論ず (帝國文學)
- 同 五月 ◎人見一太郎著ユイゴイ (民友社)
- 同 七月 外山正一、中村秋香、上田萬年、阪正臣合著新體詩歌集 (大日本圖書株式會社)
- 同 八月 大淵淺編、征討清歌集
- 同 同 ×中村秋香の新體詩論 (太陽)
- 同 同 ◎雜誌文庫生る
- 同 十月 外山、山散文詩、可兒大尉等を發表す (帝國文學)
- 明治二十九年一月 ×中村秋香の今日の歌并に擬古體普通體 (太陽)
- ×叙事論と抒情詩 (太陽)
- ×叙事詩の歴史的考察 (太陽)
- 同 十月 與謝野鐵幹著東西南北 (明治書院)
- 同 十一月 佐藤儀助編、青年新體歌集 (新聲社)
- 同 十二月 森鷗外著 (詩文集) 月草 (春陽堂)

- 同 十二月 鹽井雨江、大町桂月、武島羽衣合著 美文 韻文 花紅葉 (博文館)
- 同 井上巽軒の比沼山の歌 (太陽及帝國文學)
- ×外山山の新體詩及朗讀法 (帝國文學)
- 土井晚翠の紅葉青山水流急 (帝國文學)
- 島崎藤村の薄氷及鶏 (文學界)
- ×竹の里人、日本人に詩を載す
- ×佛國詩人ボオル、エルレエヌ死す
- ×英國詩人キリアム、モリス死す
- 明治三十年一月 與謝野鐵幹著天地玄黃 (明治書院)
- 同 一月 ×外山正一、新體詩及日本演劇を論ず (帝國文學)
- 同 二月 嵯峨の舍等六家合著抒情詩 (民友社)
- 同 同 ×新體詩の形式 (太陽)
- 同 三月 新詩會編、この花 (同文館)



同

- 五月 代々の面影
- 五月 ×上田萬年新體詩に就て (太陽)
- 六月 ×姉崎嘲風の抒情詩に於ける月 (太陽)
- 六月 ×中村秋香の新體詩歌論 (太陽)
- 同 ×新體詩の名稱の適用 (太陽)
- 同 ×抒情詩の地位に就て (太陽)
- 七月 三木天遊繁野天來合著鈴蟲松蟲 (東華堂)
- 同 内村鑑三の(譯詩集)愛吟 (警醒社)
- 八月 島崎藤村著若菜集 (春陽堂)
- 九月 大和田建樹著散文雪月花 (博文館)
- 同 石橋鐵次郎編心の緒琴 (文盛堂)
- ◎齋藤綠雨著あま蛙 (附録新體詩見本)
- ◎新著月刊生る。◎東京獨立雜誌生る
- 美妙の魔界天女 (大和琴)

- 明治三十一年一月
- 藤村の天馬 (文學界二月) 同人の深山の逍遙 (帝國文學三月)
- 藤村の四つの袖 (新著月刊)
- 天來の雨聲鳥語錄 (新著月刊)
- 大月隆編山高水長 (文學同志會)
- ×井上哲次郎の新體詩を論ず (帝文一、二)
- ◎佐々木信綱編續日本歌學全書 (博文館)
- ×中村秋香の新體詩論 (太陽)
- 三十一一年一月ヨリ五月マデ
- 三月 池阜雨郎著淚痕集
- 五月 ◎文學界五十八號にて廢刊
- 六月 與謝野鐵幹等月の桂 (中學書院)
- 同 島崎藤村著一葉舟 (春陽堂)
- 八月 朝比奈天行の涼風 (岡崎屋) さざなみ (同上)
- 十一月 中村秋香の新體詩歌自在 (博文館)



- 十二月 島崎藤村の夏草〔春陽堂〕
- 同 大町桂月の詩文集黄菊白菊〔博文館〕
- 六月 ◎新著月刊廢刊◎八月國民の友廢刊◎十月早稻田文學廢刊
- 晚翠の天地有情（帝文一月號）
- 晚翠の馬前の夢（反省雜誌夏期附錄）
- 晚翠の星落秋風五丈原（帝文十一號）
- ×桂月の日本の詩形を論ず（帝文）
- ×新體詩の振興案（早文）
- 明治三十二年四月 晚翠著天地有情〔博文館〕
- 六月 兒玉花外、山本露葉、山田枯柳の合著風月萬象〔文學同志會〕
- ×高山樗牛の詩歌に於ける人體美（太陽）
- 七月 石橋愛次郎編花天月地〔大學館〕

- 八月 塚越恆子の著花晨月夕〔同人〕
- ×矢田部尙今逝く
- 八月 高松正道編詩文集清風明月〔大學館〕
- 九月 大和田建樹著新體詩學〔博文館〕
- 十一月 薄田泣菫の詩集暮笛集〔文淵堂〕
- 十二月 大和田建樹の散文韻文深山櫻〔博文館〕
- 晚翠の萬里長城の歌（帝文）
- 藤村の勞働雜詠（新小説）
- 岩野泡鳴の嘉播の親（學窓餘談）
- ×淺野和三郎の散文詩の成立（帝文）
- 明治三十三年二月 ◎高安月郊の詩文集金字塔
- 三月 ◎新詩社の明星生る
- 三月 阿山居士編美文韻文故郷の土産〔松邑三松堂〕
- 同 ×外山、山逝く



- 四月 山本榮次郎編美文韻文小山水〔矢島誠進堂〕
- 同 石橋玄潮の新體詩指南〔大學館〕
- 五月 角田浩々の詩國小觀〔文淵堂〕
- 同 醉茗露葉花外等のわか草〔新聲社〕
- 同 石橋愛太郎の新體詩指南〔大學館〕
- 六月 河井醉茗編詩美幽韻〔内外出版協會〕
- 同 丸岡月の桂のや田口春塘の朝嵐夕雨
- 七月 久保天隨等美文韻文藻かり舟
- 八月 瀧澤秋曉の有明月
- 九月 ×西村眞次の美文韻文創作要譯〔博文館〕
- 十月 栗島狭衣編紫紅集〔盛文堂〕
- 十一月 ×大西操山逝く
- 十二月 高安月郊の夜濤集
- 泣菫の遺憤及あゝ杜國〔天地人〕

- 明治三十四年一月
- △金子薫園の片われ月〔新聲社〕
  - 同 河井醉茗の無弦弓〔内外出版協會〕
  - 二月 △佐々木信綱撰竹柏園集第一編
  - 三月 鐵幹のむらさき〔東京新詩社〕
  - 同 鐵幹の詩歌散文鐵幹子〔誠進堂〕
  - 五月 晚翠の曉鐘〔博文館〕
  - 六月 雨江の詩文集暗香疎影〔博文館〕
  - ◎坪内逍遙の英文學史〔早稻田大學出版部〕
  - 七月 △服部躬治の迦具土〔白鳩社〕
  - 七月 吉野臥城の小百合集〔警醒社〕
- 鐵幹の小生の詩〔明星〕
- 晚翠の吊吉國樟堂〔帝文〕
- 同 黑龍江上の悲劇〔帝文〕
- 平木白星の亞細亞の歌〔明星〕



- 同 岩野泡鳴の露じも〔同人〕
- 同 敬天牧童の短笛長鞭〔美育社〕
- 八月 藤村の落梅集〔春陽堂〕
- 同 △鳳晶子のみだれ髪〔東京新詩社〕
- 九月、十二月 與謝野寛編片袖第一集第二集〔同上〕
- 十月 國府犀東の詩文集花柘榴〔文武堂〕
- 同 泣菫のゆく春〔文淵堂〕
- 同 金尾種次郎編春草
- 十一月 清水橋村の野人 總南子の名残〔尙榮堂〕
- 十二月 尾上柴舟譯ハイネの詩〔新聲社〕
- 同 鈴木鼓村月郊の橘姫に作曲す
- 同 上田敏の詩文集みをつくし〔文友館〕
- ◎同詩聖ダンテ〔金港堂〕 同文藝論集〔春陽堂〕
- ◎同近海外文學〔文友館〕 ◎雜誌白虹生る

- 星菫派の歌人輩出す
- 蒲原有明の獨絃哀歌〔明星〕
- 平木白星の男神女神〔明星〕
- 明治三十五年一月 △薰園柴舟の叙景詩〔新聲社〕
- 蒲原有明の草わか葉〔新聲社〕
- 二月 吉野臥城の野茨集〔尙文館〕
- 三月 太田みづほのやの詩歌集つゆくさ〔文友館〕
- 同 山縣五十雄譯英米詩歌集〔内外出版協會〕
- 同 ◎上田敏の續最近海外文學〔文友館〕
- 四月 長谷川濤涯の詩歌集おぼろ舟〔駭々堂〕
- 横瀬夜雨の夕月〔旭堂〕
- 五月 北村佳逸の殘月
- 六月 高島泉郎のせせらぎ〔文明堂〕
- ◎坪内雄藏の英詩文評釋〔早稻田大學出版部〕



- 七月 今村敬天の青春の詩〔美育社〕
- 本村鷹太郎(評)文界之大魔王〔大學館〕
- 九月 ×子規逝く 大和田建樹の長恨歌〔東京出版社〕
- 十月 韻文朗讀會を神田青年會館に開く
- 同 三浦白水の西詩餘韻〔尙文館〕
- 同 ◎天知、藤村、禿木、秋骨編透谷全集〔文友館〕
- 同 ◎山田美妙の新體詩歌作法〔青木嵩山堂〕
- 十一月 湯淺半月の半月集〔金尾文淵堂〕
- 同 小泉文八のシャトーブリアンの哀調
- 十二月 鐵幹の詩歌集埋れ木〔博文館〕
- 同 森鷗外の劇詩玉匣兩浦島
- 桑田春風の金言唱歌
- ×小山鼎浦の現今の新體詩家〔帝文〕
- ×岩野泡鳴の詩句格調管見〔明星〕

- 泣菫の公孫樹下に立ちて〔小天地〕
- 有明の新鶯曲〔新聲〕
- 有明の佐太大神〔明星〕
- 前田林外の極樂鳥賦及素盞鳴尊を讚する歌〔明星〕
- 兒玉花外の暗中田鼠に告ぐる歌〔帝文〕
- 同人の孤槍吟〔新小説〕
- 白星の日本國歌及アギナルト〔明星〕
- 白星のおさよ新七〔片袖〕
- 晚翠の亞細亞大陸回顧の歌〔帝文〕
- 藤岡東園の阿彌陀が峯及嵯峨の卷〔帝文〕
- 岩城孤秋の牧笛餘韻〔帝文〕
- 高安月郊の曾我蕭白〔明星〕
- 月郊の劇詩後の羽衣〔文藝界〕



明治三十六年二月

山本露葉の海のあなたへ〔雜誌海〕

白星の日本國歌〔内外出版協會〕

佐々木信綱の美文磯馴松〔博文館〕

三月 青戸白虹の落穂集

同 今村良治譯詩集舶來すみれ〔美育社〕

同 木村鷹太郎の譯詩パリジナ〔尙文館〕

四月 高安月郊の春雪集〔同人〕

五月 蒲原有明の獨絃哀歌〔白鳩社〕

同 武島羽衣の霓裳微吟〔博文館〕

七月 音樂學校歌劇オルフオイスを演ず

九月 今村敬天の牧童集〔美育社〕

今村敬天の瓜の蔓〔同〕

七月 ◎山縣五十雄の英詩研究合本

八月 兒玉花外の日本社會主義詩集發賣禁止せらる

明治三十七年一月

△與謝野晶子の小扇〔文淵堂〕  
平木白星選七つ星〔如山堂〕

十一月 曉烏敏の迷の跡〔文明堂〕

×石劍の曉烏敏著迷の跡の評〔帝文〕

×萬朝報處世の歌を募る。

×大阪朝日新聞社大阪市歌を募る。

近藤逸五郎の歌劇臺帳オルフオイス

森鷗外譯詩オルフェウス成る。

白百合を出す。

◎前田林外、岩野泡鳴、相馬御風純文社を組織し

米野口の英詩集 From the Caspian Sea.

十月 山崎紫紅の劇詩日蓮上人

十月 △佐々木信綱の思草〔博文館〕

九月 鷗外の史詩長會我部宗親〔國光社〕



- 二月 兒玉花外の花外詩集〔文淵堂〕
- △吉野臥城等の新韻〔新韻會〕
- 四月 ×綠雨逝く
- 五月 鐵幹晶子の詩歌文集毒艸〔本郷書院〕
- △竹の里人撰歌〔根岸短歌會〕
- 六月 秋元芦風の紛紅集〔有倫堂〕
- 同 秋田雨雀の黎明〔中野書房〕
- 同 △落合直文の萩屋遺稿〔明治書院〕
- 同 ◎雜誌世界生る
- ×讀賣新聞社大日本膨脹の歌を募る。
- 泣菫の雷神賦〔明星〕
- 泣菫の金剛山の歌、天馳使の歌、翡翠の歌〔新小説〕
- 有明の夏祭、遺曲〔明星〕 同人國土創成賦〔太陽〕

- ◎鐵幹、林外、白星の史詩源九郎義經〔白百合〕
- ×花外の馬上哀吟〔同〕
- ×月郊の惜春詩及裾野〔同〕
- ×泡鳴の湖畔靜思、海邊雜吟、女護海島〔明星〕
- ×同人の史詩豐太閤〔讀賣〕 同人の鳴門姫〔白百合〕
- ×晚翠のセイヌ江上の別離及司馬子長名山藏書賦〔帝文〕
- 山崎紫紅の地獄卷
- ×愛天の懸賞當選新體詩を評す〔帝文〕
- 九月 藤村詩集〔合本〕〔春陽堂〕
- 同 樋口響海の殘花集〔文學同志會〕
- 十月 △北村季晴の叙事唱歌露營の夢
- 十一月 小林紫軒の玉琴集〔文學同志會〕



同

逍遙の劇詩新曲浦島〔早稻田大學出版部〕

△尾上柴舟の銀鈴〔新聲社〕

◎小山内薫等の雜誌七人生る

小杉未醒の陣中詩篇

十二月

白星の新體心中おさよ新七〔如山堂〕

小野竹三譯詩花もみぢ〔内外出版協會〕

泡鳴の夕潮〔有倫堂〕

△山田登美子増田雅子與謝野晶子戀ごろも〔本郷

書院〕

◎大西博集全集〔警醒社〕

×雛菊の三十六年の詩界〔白百合〕

×某氏の詩界漫言心のあとの批評〔白百合〕

×櫻井天壇の詩人有明の評〔帝文〕

◎逍遙の新樂劇論〔早稻田大學出版部〕

×芳賀矢一の詠史の歌〔帝文〕

泣菫の霜月の一日及如月の一夜〔明星〕

有明の束の間なりき〔白百合〕 同人姫が曲〔新

小説〕

林外の壁畫孔雀の賦及金翅鳥王の歌〔白百合〕

泡鳴の世外の獨白〔白百合〕

白星の魔の出顯〔帝文〕

露伴の出廬〔讀賣〕

花外の故園〔白百合〕

鐵幹の大沼姫〔明星〕

月郊の劇詩赫夜姫〔太陽〕

臥城の白金小櫛〔白百合〕 佐波遲姫〔心の花〕

御風のまぼろし〔白百合〕

◎清水橋村の國詩生る。



明治三十八年一月

◎新體詩會の白鳩生る。 萬年草生る。  
幸田露伴心のあと [春陽堂]

△山川登美子増田まさ子與謝野晶子の戀衣 [本郷書院]

二月 木村鷹太郎の譯詩海賊 [尙友館]

馬場孤蝶編花がたみ [左久良書房]

若月保次譯三人の歌女 [内外出版協會]

三月 大田みづほのや久保田山百合の詩歌集山上湖上 [金色社]

三月 入江花錦等不如歸集 [文學同志會]

三月 仁科徳之助靈華集 [三光堂]

同 前田林外夏花少女 [純文社]

同 野口雨情の民謡集枯草

同 秋元芦風の譯詩野葡萄 [日高有倫堂]

同 金子薫園の小詩國 [新聲社]

同 河井醉茗の劍影 [金色社]

同 大月隆編殘雪集 [文學同志會]

五月 泣菫の二十五絃 [春陽堂]

同 石川啄木のあこがれ [小田島書房]

六月 醉茗の塔影 [文淵堂] 泣菫の白玉姫 [同上]

七月 △金子薫園選凌霄花 [血潮社]

尾上柴舟の金帆 [本郷書院] 三木露風の夏姫 [血

汐會] 有明の春鳥集 [本郷書院] 泡鳴の悲戀悲

歌 [有倫堂] 溝口白羊の不如歸の歌 [岡村書店]

片山天弦の譯テニソンの詩 [隆文館]

浦瀬白雨の譯ウゾルゾオールの詩 [隆文館]

八月 清水橋村正富汪洋の詩歌集夏廂 [旭堂]

平木白星撰天火篇 [古今文學會]

白星の劇詩耶蘇の戀 [建文館]



- 九月  
岸本能武太撰英詩海詩百篇〔英學新報社〕  
溝口白羊の史詩近藤重藏〔福岡新三〕  
小山内薫の小野のわかれ〔本郷書院〕  
同  
△窪田空穂のまひる野〔鹿鳴社〕  
△相馬御風の睡蓮〔純文社〕 沼波瓊音の囀〔南江堂〕 田山花袋譯キイツの詩〔隆文館〕  
竹田雅弘編詩歌文集たか潮〔福岡以文會〕  
鹿島櫻巷の新體詩獨習〔大學館〕
- 十月  
上田敏譯詩集海潮音〔本郷書院〕  
泡鳴の劇詩海堡技師〔文湖堂〕  
小原無絃譯ロセツチの詩〔昌平堂〕  
小原無絃譯西吟新譯〔本郷書院〕  
横瀬夜雨の花守〔隆文館〕
- 十一月  
池阜雨郎のかぶら矢〔自然社〕

- 同  
十二月  
石橋鳴夢選五彩雲〔文學同志會〕  
逍遙の劇詩新曲かぐや姫〔早稻田大學出版部〕  
久保天隨の美文夕紅葉〔有倫堂〕  
入江雅次郎のふる郷集〔文學同志會〕  
野口米次郎の英詩集夏雲〔春陽堂〕  
小原無絃の譯ユーゴーの詩〔本郷書院〕  
溝口白羊の家庭新詩金色夜叉の歌〔岡本書店〕  
幸田露伴選はつしほ〔泰山堂〕
- ◎新泉生る
- 有明の朝なり〔明星〕 同人の鏽斧〔太陽〕  
同人の誰か心伏せざる〔明星〕  
泣菫のわがゆく海〔明星〕 神無月の一夜〔明星〕  
同人の澤瀉〔明星〕  
泡鳴の三界獨白〔白百合〕



- 月郊の花賣及羅浮仙女 (白百合)
- 林外の夢のほのほ (白百合)
- 鐵幹の倒れし白樺の歌 (明星)
- 臥城の叙事詩天の日棹
- 晩翠の東海遊士吟 (帝文)
- 清白の夕蘭草 小山内薫の月見草
- 小松玉崑の鐘工 (帝文)
- ×中澤臨川のメーテルリンク論 (七人)
- ×春風道人の現代の新體詩 (日々新聞)
- ×吊堇の小山内薫の小野のわかれを読む (日々新聞)
- ×角田浩々の比興詩を論じて現代の詩風に及 (讀賣)
- ×片山孤村の神經質の文學を論ず (帝文)

- ×長谷川天溪の象徴文學 (太陽)
- ×中島孤鳥の象徴詩を斥く (讀賣)
- ×櫻井天壇の詩壇漫言 (帝文)
- 一、泡鳴の詩想及詩形 二、戀衣の歌人
- 三、柏馬御風の天上の春 四、林外の詩才
- 五、少年詩人石川啄木 六、平野萬里
- 七、暮春の詩 八、深刻なる戀愛詩
- 九、有明の詩論 十、温厚なる詩風
- 十一、薰園一派の歌風 十二、外國詩歌の翻譯
- 十三、泣菫氏の二十五絃 十四、白星の詩筆
- 十五、紛々たる詩集 十六、明星歌人の近作
- 十七、天弦の譯詩
- ×野の人が坪内博士の藝術觀を論じて新浦島に及ぶ (帝文)



- ×出廬及心中おさよ新七の批評 (帝文)
- ×吉田豊吉の聲樂を藉る詩形と新樂式 (帝文)
- ×小山鼎浦の自然詩人を憶ふ (帝文)
- ×天壇の象徴詩を論じて有明の春鳥集に及ぶ (帝文)
- ×天壇のカールフツセの叙事詩の紹介 (帝文)
- ×天壇のヘルマンゾンの叙事詩の紹介 (帝文)
- ×山岸光宣の詩人ノワリスを論ず (帝文)
- ×蒼狗子の山崎紫紅等の夕潮を読む (白百合)
- ×相馬御風のボーの詩論の紹介 (白百合)
- ×沙金生の三十七年の短歌界評 (白百合)
- ×御風、古佛、野尻抱影の夕潮を読む (白百合)
- ×御風、古佛、抱影、紫紅、幽溪、木兄及蒼狗子の夏花少女を読む (白百合)

明治三十九年一月

- ×古佛の二十五絃を読む (白百合)
- 兒玉花外のゆく雲 [隆文館]
- 模範新體詩集、鹿島櫻巷編 [大學館]
- 秋元芦風譯シルレル詩集 [如山堂]
- 沙上寫隱の小影 [日本寫友會]
- △與謝野晶子の舞姫 [如山堂]
- △樋口麗陽の詩歌句集月桂集 [文學同志會]
- 小原無絃譯シェレーの詩 [有倫堂]
- ◎島村抱月等早稻田文學を再興す。
- ◎上田敏馬場孤蝶藝苑を出す。
- 二月 中谷無涯のすひかづら [春陽堂]
- 細越夏村の靈笛 [有倫堂] 佐々木理平治の紫玉
- 高濱長江の小羊 [中庸堂] 樋口配天のわか草
- 水野華舟のあららぎ [金曜社]



三月

小原無絃譯虹のかけ〔内外出版協會〕

無絃の譯花の詩〔本郷書院〕

白星の劇詩釋迦〔讀賣新聞〕

馬場孤蝶編春駒〔左久良書房〕

四月

溝口白羊の己が罪の歌〔文淵堂〕

小原無絃の譯海の詩〔文陽堂〕

△金子薰園の伶人〔博報堂〕

野口米次郎等あやめ會を起す。

五月

森鷗外趣味井に藝苑に即興詩風の市井詩を載す

伊良子清白の孔雀船〔左久良書房〕

泣菫の白羊宮〔文淵堂〕

醉茗の詩文集玉蟲〔女子文壇社〕

六月

佐々木信綱の詩歌集あけぼの〔修文館〕

泡鳴の泡鳴詩集〔金尾文淵堂〕

月郊の寢覺草〔金尾文淵堂〕

晚翠の東海游士吟〔大日本圖書會社〕

林外の花妻〔如山堂〕

あやめ會のあやめ草〔如山堂〕

◎泡鳴の神秘的半獸主義〔佐久良書房〕

△落合直文の萩の舎歌集〔明治書院〕

◎雜誌趣味生る。

◎八杉利貞の詩宗ブーシキン

七月 溝口白羊の家庭新詩源氏物語〔岡村書店〕

◎七月 横瀬夜雨の花守日記〔本郷書院〕

△窪田空穂、水野葉舟の明暗〔金曜社〕

八月 石川正作編明治新體詩集

九月 あやめ會の豊旗雲〔如山堂〕

入江花錦の斷腸〔文學同志會〕



- 入江涼月選青蘭集〔圭文堂〕
- 白星の劇集釋迦〔如山堂〕
- △與謝野晶子夢の華〔文淵堂〕
- 十月 溝口白羊のささ笛〔杉本書房〕
- 西村醉夢譯西詩の薰〔參本舎〕 浦口文治の英詩の葉〔英學新報社〕 小原無絃譯バードの詩〔有倫堂〕 大和田建樹の新體詩早學〔修學堂〕
- 十一。 一色醒川の頌榮〔京華堂〕
- 河井醉茗撰桂の花〔左久良書房〕
- 十二月 正富汪洋の詩歌文集小鼓〔左久良書房〕
- ◎岩城準太郎の明治文學史〔育英社〕
- 泣菫の葛城神〔早文〕 同人魂の常井〔太陽〕
- 東儀鐵笛魂の常井に譜を作る。
- 吉野臥城の天岩戸及天日槍〔中央公論〕

- 晩翠の譯ミルトンの失樂園〔太陽〕
- ×後藤宙外、新曲赫映姫に就て〔白百合〕
- ×小杉乃帆流の新曲赫映姫を讀む〔白百合〕
- ×天壇の詩壇漫言二十海潮音〔帝文〕
- ×片山正雄の洛陽の酒徒ポール、エルレーヌが事〔白百合〕
- ×小山鼎浦の神秘派と夢幻派と空靈派〔帝文〕
- ×X生の三十八年の詩界〔白百合〕
- ×石井眞多樓の曲曲赫映姫を評す〔帝文〕
- ×志田義秀の日本民謡概論〔帝文〕
- ×天壇の詩壇漫言
- 二十一鬼才晶子 二十二薰園の自然詩
- ×天壇の叙情詩に於ける自然に就て〔白百合〕
- ◎時代思潮廢刊



- ×角田浩々のあやめ草評〔讀賣〕
- ×新詩人の、林外の花妻を讀む〔帝文〕
- ×小杉乃帆流の花妻を讀む。同人の白羊宮を讀む〔白百合〕

三月 ×芳賀矢一の日本詩歌に韻のなき理由〔日本新聞〕

- ×X生の、あやめ草を讀む〔白百合〕
- ×中央公論、現代に於ける新體詩の價值につき諸家の意見を徴す。
- ×上田敏、民謡の詞及曲の蒐集の急務を論ず〔音樂新報〕
- ×天壇の星に關する詩歌〔白百合〕
- ×是影の、神秘的半獸主義及東海游士吟の批評〔帝文〕

明治四十年一月

- ×碌々の、夢の華を讀む〔帝文〕 御風の、花妻を讀む〔白百合〕
- ×天壇の近世獨逸詩歌と民謡の關係〔白百合〕
- ×志田素琴の日本詩學上に於ける民謡の位置〔白百合〕
- ×抱影の、民謡に就て〔白百合〕
- ×天壇のスラブ民族の民謡〔白百合〕
- 兒玉花外の天風魔帆〔平民書房〕
- 澤村胡夷の湖畔の悲歌〔文港堂〕
- 高橋五郎の梵劇シヤクンダラ〔前川文榮堂〕
- △與謝野晶子の黒髪〔文淵堂〕
- 木村鷹太郎譯バイロンの天魔の怨〔岡崎屋〕
- 横瀬夜雨の二十八宿〔文淵堂〕
- 池本奇瑤の玉ぶち〔園屋書店〕

二月



- △平野萬里の若き日〔佐久良書房〕
- ◎淺野和三郎の英文學史〔大日本圖書會社〕
- 三月 野口雨情の朝花夜花〔明文舎〕
- △金子薫園のわが思〔弘成館〕
- 前田林外編日本民謡全集〔吉田正太郎〕
- 木村鷹太郎譯バイロンのマゼツバ〔眞善美協會〕
- 四月 小林愛雄の管絃〔彩雲閣〕
- 松山白洋の新體詩入門〔新潮社〕
- 逍遙の劇詩鉢かつき姫
- 四月 ◎白百合廢刊
- 五月 △尾上柴舟の靜夜〔隆文館〕
- ◎河井醉茗詩草社を起し雜誌詩人を出す。
- 六月 秋元蘆風のヘルマン、ド、ロテアの譯鴛鴦曲〔佐久良書房〕

- 六月 アアサ、ロイド松浦一共譯下田歌子の皇國不李〔英〕〔春陽堂〕
- 七月 ◎角田浩々の鷗心錄〔文淵堂〕
- 八月 秋元蘆風譯シルレル鐘の歌評釋〔東亞堂〕
- 同 木村鷹太郎譯シェリの含羞草〔武林堂〕
- 川臨世外の新體詩作法自在〔大學館〕
- 九月 鷗外のうた日記〔春陽堂〕
- △十月會同人の白露集〔文藝社〕
- 十月 神長瞭月の血涙集〔日清堂〕
- ◎小山内薫の主幹新思潮生る
- 十一月 三井甲之の消なば消ぬがに〔彩雲閣〕
- 花外譯バイロン詩集〔大學館〕
- 前田林外編日本民謡全集續篇〔吉田正太郎〕
- 十二月 岩野泡鳴の新體詩の作法〔修文館〕



- 深江種明譯テニスン的女子大學〔東西社〕
- 泣菫の海賊、機關車、停車場、蛞蝓、爐中の人
- 有明の絶望、茉莉花、水のおと、痴夢
- 泡鳴の闇の杯盤、棲とる君、朱のにじみ、葉卷のくゆりの諸篇成る
- 上田敏の牧羊神 (讀賣)
- 鐵幹の彗星 (明星)
- 秋元蘆風のタンホイゼル (心の友)
- 白星の劇詩西郷隆盛 (日本及日本人) 同人の漂泊子 (文章世界)
- 吉野臥城の劇詩叙事詩天若彦 (太陽)
- ×八杉貞利の露西亞文學に於ける國民叙事詩 (帝文)
- ×鐵幹の詩話 (藝苑)

- ×大谷繞石譯小泉八雲の日本の子供の歌 (百合)
- ×折竹蓼峯のルコンド、リイルの詩に現はれたる虚無 (帝文)
- ×藤岡東圃の新體詩論 (帝文)
- ×泡鳴の自然主義表象詩論 (帝文)
- ×泡鳴の日本古代思想より近代の表象主義を論ず (早文)
- ×自然主義表象詩論評 (時事新聞)
- ×八杉荔舟の露國詩界の古今 (帝文)
- ◎「海國」の詩人散文號出づ頓て廢刊
- ×島村抱月の詩論の根本疑 (早文)
- ×泡鳴、早稻田文學並に時事新報の記者に答ふ (讀賣)
- 人見東明等早稻田詩社を起す



明治四十一年一月

×角田浩々、辻談義に於て泡鳴の詩論を批評す  
×泡鳴同上の駁

×折竹蓼峯の近代佛國詩界の概観 (帝文)  
×黒雲子の詩壇漫言 (帝文)

×天壇のミュンヘン詩派の詩歌 (帝文)  
×泡鳴萬朝報の素堂と歌劇につきて論争す  
×泡鳴新思潮に新體詩史を載せ始む

蒲原有明の有明詩集 [易風社]

吉野臥城編明治詩集 [昭文堂]

四月 △佐々木信綱撰玉琴 [春陽堂]

泡鳴の闇の杯盤 [有倫堂] 石川啄木のあこがれ  
以後成る

◎窪田空穂の新派短歌評釋

六月 與謝野晶子編白光 [新潮社]

六月 相馬御風の御風詩集 [新潮社]

河井醉茗の新體詩作法 [博文館]

七月 △與謝野晶子編常夏 [大倉書店]

筒井菫坡の東天紅 [石塚書店]

久保天隨中内蝶二の美文韻文藻かり舟 [昭文館]

宮森桃潭小林潜龍譯註英文百家詩選 [三省堂]

△若山牧水の海の聲 [生命社]

清水橋村編筑波紫 [有倫堂]

九月 佐々木信綱の歌學論叢 [博文館]

十月 ◎泡鳴の新自然主義 [有倫堂]

十二月 東亞協會文藝部編曉露集 [弘道館]

同 ◎片山孤村の最近獨逸文學の研究 [博文館]

×折竹蓼峯の佛蘭西文學界の消息 (帝文)

×橄欖子の有明詩集を讀みて (帝文)



明治四十二年一月

- × 蓼峯の現代佛國象徵詩家 (帝文)
- × 抱月の口語詩論 (讀賣)
- × 抱月の現代詩 (詩人)
- ◎ 雜誌スバル生る

三月

北原白秋の邪宗門 [易風社]

△ 佐々木信綱選國民歌集 [博文館]

四月

× パンの會起る

大和田建樹の散文韻文野菊 [博文館]

五月

與謝野晶子の佐保姫 [日吉丸書房]

六月

高濱長江の煉獄 [古今堂]

八月

△ 尾上柴舟の永日 [弘道館]

九月

さわらびのこのはな集 [東京堂]

三木露風の廢園 [光華書房]

× 臥城の新體詩の研究

明治四十三年一月

△ 若山牧水のひとり歌へる [八少女會]

◎ 太陽臨時増刊明治文藝史 [博文館]

二月

△ 近藤元の驕樂 [光華書房]

△ 前田夕暮の收穫 [東雲堂]

△ 金子薰園の覺めたる歌 [春陽堂]

△ 鐵幹の相聞 [明治書院]

草野柴二譯ツルゲーネフ散文詩 [新潮社]

◎ 鹽釜天鷲のゲーテの詩の研究 [博文館]

四月

△ 若山牧水の別離 [東雲堂]

△ 土岐哀果の NAKIWARAI [ローマ字ひろめ會]

△ 十月會同人の黎明 [十月會]

岡島狂花のレッシングの詩 [讀賣新聞社]

△ 白岩艶子の采風 [竹柏會]

△ 禮嚴法師歌集 [新詩社]



- 五月 河井醉茗の散文詩集霧 [東雲堂]
- 五月 細越夏村の菩提樹の花咲く頃 [悠々社樓]
- 七月 鐵幹の詩歌集榭の實 [博文館]
- 八月 細越夏村の星過ぎし後 [悠々社樓]
- 九月 川路柳虹の路傍の花 [東雲堂]
- 九月 瓜生緑川の塔影 [岡陽館]
- 十月 吉井勇の酒ほがひ [昂發行所]
- 十月 佐々木信綱の日本歌學史 [大日本學術協會]
- 十月 内海泡沫の淡影 [以文會]
- 十一月 矢澤孝子の鷄冠木 [田中書店]
- 十一月 三木露風の寂しき曙 [博報社]
- 十一月 秋元蘆風の北の空 [同人]
- 十一月 仲田勝之助譯ツルゲネーフのセニリア [春陽堂]
- 十一月 岡澄里の朝夕 [新潮社]

- 十二月 細越夏村の褐色の花 [同人]
- 十二月 青山霞村の口語詩草山の詩 [至誠堂]
- 十二月 石川啄木の一握の砂 [東雲堂]
- 十二月 山中波泉の薄暮 [文潮會]
- 明治四十三年 内藤濯の自由詩の限界 [帝文]
- 明治四十三年 同人の詩話 [帝文]
- 明治四十三年 同人のフランスの詩界 [帝文]
- 明治四十四年一月 牧田勝譯ロングフェローの將軍の戀 [建文館]
- 二月 與謝野晶子の春泥集 [文淵堂]
- 五月 長谷川康譯テニソンのイノツクアーデン [建文館]
- 六月 北原白秋のおもひで [東雲堂]
- 六月 人見東明の夜の舞踏 [扶桑社]
- 七月 星野水裏の濱千鳥 [實業之日本社]



- 八月 廣井浩風の獸苑〔清明堂〕
- 九月 春山郊汀の異教の國の春〔弘文館〕
- △若山牧水の路上〔博信堂〕
- 十月 高濱長江の詩文集醉後の花〔今古堂〕
- 十一月 白秋の邪宗門再版
- 十一月 高濱長江の草雲雀〔今古堂〕
- 十一月 △金子薫園の山河〔新潮社〕
- 明治四十五年一月 福永挽歌の散文詩習作〔岡村書店〕
- 一月 福田夕咲の春の夢〔文星堂〕
- △近藤元の南方の花〔文光堂〕
- 横瀬夜雨の夜雨集〔女子文壇社〕
- △尾上柴舟の日記の端より〔辰文館〕
- △晶子の青海波〔有朋館〕
- 二月 △土岐哀果の黄昏に〔東雲堂〕

- 二月 ×鈴木虎雄の格調神韻性靈の三詩説〔藝文〕
- 三月 ◎厨川白村の近代文藝十講〔大日本圖書會社〕
- 四月 平木白星の劇詩平和〔如山堂〕
- △窪田空穂の空穂歌集〔中興館〕
- 五月 森川葵村の夜の葉〔東雲堂〕
- 同 ×近重眞澄の新體詩の押韻法に就て〔藝文〕
- 七月 ×岩野泡鳴の「近重博士の押韻法に就て」〔藝文〕
- 九月 ×近重眞澄の「岩野泡鳴氏の批評に答ふ」〔藝文〕
- 六月 △石川啄木の悲しき玩具〔東雲堂〕
- 九月 △富田碎花のかなしき愛〔岡村書店〕
- △前田夕暮の陰影〔白日社〕
- △若山牧水の死か藝術か〔東雲堂〕
- 十月 △吉井勇の歌文集水莊記〔東雲堂〕
- 十月 秋元蘆風譯樂劇タンホイゼル〔精華書院〕



- 十一月 △佐々木信綱の新月〔博文館〕  
 △樋口一葉の一葉歌集〔博文館〕  
 十二月 青山霞村の文詩歌集面影〔梅竹書屋〕  
 小林愛雄譯近代詞華集〔春陽堂〕  
 百田楓花編月光と臥床〔白藻社〕  
 同 夜〔短檠社〕  
 ◎聖盃創刊  
 村山至大の少女詩集母の御手〔敬文堂〕  
 △森園天涙の自畫の山〔本郷書院〕  
 △杉野照子水仙咲く日〔趣味社〕  
 ◎金子薫園の歌文新話  
 ◎同 作歌練習法〔新潮社〕  
 大正二年二月 △白秋の桐の花〔東雲堂〕  
 一月 ◎山内素行の日本短歌史〔敬文館〕

- 二月 野口米次郎のThe Pilgrimage〔東雲堂〕  
 三月 秋元蘆風の獨逸名詩評釋〔精華書院〕  
 同 △篠原正人のこゝろ〔北隆館〕  
 四月 △内藤銀策の旅愁〔抒情詩社〕  
 同 △岡澄里の早春〔東雲堂〕  
 同 △原田琴子のふるへる花〔岡村書店〕  
 同 △日高光子の紅蘭遺稿  
 同 永井荷風譯珊瑚集〔靑山書店〕  
 五月 △啄木の啄木歌集啄木遺稿詩文集〔東雲堂〕  
 ×片山天絃のアーサーシモンス論 同イエーツ論  
 (生の欲求と文學)  
 同 △吉井勇の歌文集戀愛小品〔靑山書店〕  
 同 △松村英一の春かへる日に〔十月會〕  
 同 山村暮鳥の三人の處女〔新聲社〕



- 六月 △吉井勇の昨日まで〔靱山書店〕
- 七月 土岐哀果の詩歌集不平なく〔春陽堂〕
- 同 聖盃イエーツの特別號を出す
- 同 竹友藻風の祈禱〔昂發行所〕
- 同 曉烏敏の散文詩凋落〔無我山房〕
- 同 △久保田柿人中村憲吉の馬鈴薯の花〔東雲堂〕
- 同 △原あさをの涙痕〔東雲堂〕
- 同 北原白秋の東京景物詩〔東雲堂〕
- 八月 △前田純孝の翠溪歌集〔葛原滋〕
- 九月 △牧水のみなかみ〔靱山書店〕
- 同 三木露風白き手の獵人〔東雲堂〕
- 同 ◎聖盃の改題假面出づ
- 同 △宮内猪之熊集〔正宗敦夫〕
- 十月 △齋藤茂吉の赤光〔東雲堂〕

- ◎岩野泡鳴譯表象派の文學運動〔新潮社〕
- 十月 △尾山篤二郎のさすらひ〔岡村書店〕
- 十一月 土岐哀果の竹みて〔東雲堂〕
- 同 △石樽千亦編八木善文歌集〔八木孝文〕
- 同 國木田獨歩の獨歩詩集〔東雲堂〕 ◎森鷗外のギョオテ傳〔富山書房〕
- 同 竹久夢二のどんたく〔實業の日本社〕
- 十二月 柴田豊の詩文集登臨〔中興館〕
- 同 △吉井勇の戀人〔たちばなや〕
- 同 三木露風の露風集〔東雲堂〕
- △嵯峨秋子の淋しき命
- 大正三年一月 晶子の詩歌集夏より秋へ〔文淵堂〕 天地有情第  
四十四版
- 二月 △薰園の草の上〔新潮社〕



- 二月 未來社編詩文集未來(第一集) [東雲堂]
- 三月 加藤介春の獄中の哀歌 [東京堂]
- 中村秀淨の心の故郷 [岡村書店]
- 岡田哲藏の我が斷片 [六合雜誌社]
- 有本芳水の芳水詩集 [實業之日本社]
- 同 片野銳牛譯ルバイヤット [開文館]
- 四月 △牧水の秋風の歌 [新聲社]
- 佐藤清の西灘より [警醒社]
- 福士幸次郎の太陽の子 [洛陽堂] ◎内村鑑三評
- 上賢造共著平民詩人 [警醒社]
- 同 △田波御白の御白遺稿 [抒情詩社]
- 五月 川路柳虹のかなたの空 [東雲堂]
- 六月 矢澤孝子の初夏 [杉本書店] 秋元蘆風の獨逸詩  
歌講話 [南江堂]

- 六月 未來社編の詩文集未來(第二) [東雲堂]
- 同 白鳥省吾の世界の一人 [二舍書房]
- 同 △木下利玄の銀 [洛陽堂]
- 六月 ×時枝誠之の詩形論 (心の花)
- 七月 △石川宰三郎の通路 [南北堂]
- 九月 白秋の眞珠抄 [文淵堂] 櫻井鷗村著英詩評釋  
[丁未出版社]
- 同 △前田夕暮の生くる日に [白日社]
- 十月 △柴舟の白き路 [有朋館]
- 同 △尾山篤二郎編大正一萬歌集 [岡村書店]
- 同 高村光太郎道程 [抒情詩社]
- 藤澤衛彦の流行唄變遷史
- 十一月 △高橋愁雨のその日頃 [東雲堂] ◎山川丙三郎譯  
神曲 [警醒堂]



- 十一月 與謝野寛譯りらの花〔東雲堂〕
- 十二月 人見東明の戀こゝろ〔金風社〕
- ◎井上通泰の萬葉新考第一卷〔歌文珍書同好會〕
- 同 白秋の白金の獨樂〔文淵堂〕
- 同 鳴海うらぶるのローマ字詩集土に歸れ〔日本のローマ字社〕
- 同 宮崎湖處子編朗吟集〔日吉堂〕 ◎柳宗悅の著キリアム、ブレイク〔洛陽堂〕
- 同 北村透谷選集〔詩文集〕〔新潮社〕
- 同 柳澤健の果樹園〔東雲堂〕
- 大正四年一月 ×瀬戸のドストエフスキイの研究(假面) 日夏歌之助のダヌンチオの研究(假面)
- 同 ×山宮允の譯イエーツの詩歌の象徴(善惡の觀念中よりの抄譯)(未來)

- 一月 増野三良譯東方劇詩智慧樹 (未來)
- 同 柳澤健譯アルツールランボアの醉ひどれの船 (同)
- 同 新城和一の譯アルベエルサマンの詩。未成の詩。夏時 (同)
- 同 ×服部嘉香のリズム論 (同)
- 同 ×西條八十のエルハアレンが詩の徑路 (同)
- 同 灰野庄平譯タゴールの詩。かほり。詩人 (同)
- 同 ×川路柳虹の製作 (同)
- 同 ×灰野庄平の見不可見 (同)
- 大正四年一月 △正宗敦夫の鶏肋(同人) 竹友藻風の浮彫〔嵩松堂〕
- 同 △松本初子の藤むすめ〔竹柏會〕 ◎吉江孤雁の近代詩講話〔早稲田文學社〕



- 二月 △石樽千亦の潮鳴〔竹柏會〕
- ◎岩野泡鳴の惡魔主義の思想と文藝〔天絃堂〕
- 同 加藤介春の梢を仰ぎて〔金風社〕
- 三月 △吉井勇の片戀〔靱山書店〕 岩野泡鳴の戀のし  
やりかうべ〔金風社〕
- 同 與謝野晶子の詩歌集さくら草〔東京新詩社〕
- △土岐哀果の石ころ ◎山宮允の譯善惡の觀念〔東  
雲堂〕
- 同 △尾山篤二郎の明る妙〔四方堂〕
- 同 △島木赤彦の切火〔アラ、ギ發行所〕
- 同 △若山牧水の秋の落葉
- 同 △與謝野晶子選集〔新潮社〕
- 同 △金子薫園選集〔新潮社〕
- 同 △前田夕暮編發生〔白日社〕

- 三月 △宮川兼次郎の南京玉〔白金詩社〕
- 同 増野三良の譯タゴールのギタンチャリ〔東雲堂〕
- 同 マンダラ詩社のマンダラ〔東雲堂〕 三浦關造譯  
伽陀の捧物〔同人〕
- 同 △依田秋圃の林間歌集
- 同 △白蓮の蹈繪〔竹柏會〕
- 四月 △村田光烈の原始へ〔東雲堂〕
- 新潮社篇明治詩歌選〔新潮社〕
- 同 △瓜生綠川の落葉宮〔紫川社〕
- 同 増野三良譯のタゴールの新月〔東雲堂〕
- 同 富田碎花の末日頌〔岡村書店〕
- 同 土岐哀果の詩歌集街上不平〔東雲堂〕
- 五月 △前田夕暮の黑曜集〔植竹書院〕
- 同 △土岐哀果の萬物の世界〔植竹書院〕 馬場睦夫



- 譯湖上の美人〔三陽堂〕
- 五月 △若山牧水の行人行歌〔植竹書院〕
- 同 内藤銀策編傑作歌選第二輯武山英子〔抒情詩社〕
- 同 ◎竹友藻風編鬱金草〔梁江堂〕
- 同 △窪田空穂の濁れる川〔國民文學社〕
- ◎花園緑人譯註タゴールの詩と文〔ジャパンタイムス出版所〕
- 同 北原白秋のわすれなぐさ〔阿蘭陀書房〕
- 六月 △山田邦子の片々〔婦人文藝社〕
- 同 △三浦守治の移岳集〔竹柏會〕
- 同 入江花錦譯テニスの詩〔文學同志會〕
- 星野水裏の宵のあかり〔實業之日本社〕
- 同 百田宗治の最初の一人〔表現社〕
- 七月 △西郷春子の塔〔竹柏會〕

- 七月 △土岐哀果のはつ戀〔抒情詩社〕
- ◎齋木仙醉のカビールとタゴール〔東華堂〕
- ◎抱月長江御風臨川の代表的名作選集十四明治詩歌選〔新潮社〕
- 同 京田天洞永澤三紅の抒情詩歌銳角及鈍角〔天佑堂〕
- 同 △前田夕暮編外光〔白日社〕
- 同 △小川水明の生靈〔岡村書店〕
- 三木露風の幻の田園〔東雲堂〕
- 同 水野葉舟の擬視〔婦人文藝社〕
- 八月 △吉井勇の戀慕流し〔植竹書院〕 ◎城南社編名士のタゴール觀〔城南社〕
- 同 與謝野寛の詩歌集鴉と雨〔東京新詩社〕
- 同 △北原白秋の雲母集〔阿蘭陀書房〕
- 九月 △與謝野寛の灰の音〔植竹書院〕



- 原田謙次の饗宴〔蠻船社〕 川路柳虹譯ヴェル  
 レイヌ詩抄〔白日报社〕
- 九月 △熊合武雄の野火〔白日报社〕  
 平井晩村の野葡萄〔國民書院〕  
 森鷗外譯沙羅の木〔阿蘭陀書房〕
- 同 秋元芦風の獨逸現代詩人〔南江堂〕
- 同 △天野文子の桔梗集〔天野米太郎〕
- 同 ◎三木露風の露風詩話〔白日报社〕
- ◎黨園の歌に入る道〔盛文堂〕 ◎植松安譯キンチ  
 エスター氏文藝批評論〔大成堂〕
- 十月 ◎野口米次郎の日本詩歌論〔白日报社〕  
 同 増野三良譯タゴールの園丁〔東雲堂〕  
 △尾上柴舟の白き路〔洛陽堂〕  
 △若山牧水の砂丘〔博信堂〕

- 十一月 ◎土岐哀果編萬葉短歌全集〔東雲堂〕  
 同 △吉井勇の祇園歌集〔新潮社〕  
 同 三木露風の良心〔白日报社〕
- ◎野口米次郎の日本詩歌論〔白日报社〕  
 齋藤勇譯聖パウロ〔丁未出版社〕
- 同 △加藤多喜治のかまきり〔正宗義智〕
- 十二月 △尾上柴舟の遠樹〔植竹書院〕  
 同 田中韋城の海の外より〔警醒社〕  
 竹久夢二の小夜曲 Serenads〔新潮社〕  
 片野銅牛譯ルバイヤット〔盛文堂〕  
 同 山村暮鳥の聖三稜玻璃〔人魚詩社〕
- 同 ◎佐々木信綱の和歌史の研究〔大日本學術協會〕  
 同 ◎與謝野晶子の歌の作り様〔金尾文淵堂〕  
 同 △横瀬虎壽の死のよろこび〔石蒜社〕



- 西條八十のボヘミアの詩人より (未來第二)  
 新城和一のポオル・ヴェル・エヌの詩六篇 (同)  
 山宮允譯ブレイクの詩集より (同)  
 増野三良譯フロム・リグウエダ (同)  
 川路柳虹譯フアルナン・グレグ詞華 (同)  
 ×山宮允譯ウイリアム・ブレイクとその神曲の挿畫 (同)  
 ×片野文吉氏のルバイヤットに於ける増野三良の評 (同)  
 ×三木露風の詩歌鑑賞 (同)  
 ×山宮允の日本詩歌を評す (帝文)  
 ×川路柳虹のあなたの空を読んで、露風 (同)  
 大正五年一月 福田正夫の農民の言葉 [南郊堂]  
 同 △安成二郎の貧乏と戀と [實業之日本社]

- 一月 △與謝野晶子の朱葉集 [文淵堂]  
 同 佐藤惣之助の正義の兜 [天絃堂] 兒玉花外の詩傳乃木大將 [文淵堂]  
 二月 △金子不泣の波の上 [白日报社]  
 ◎鹽谷榮の英詩英文の賞翫そゞろあるき [至文堂]  
 三月 △吉井勇の未練 [阿蘭陀書房]  
 同 △片山廣子の翡翠 [竹柏會]  
 同 竹久夢二のねむの木 [實業之日本社]  
 同 白鳥省吾の天葉詩集 [新少年社] 唐澤章太田堅合著詩歌集ゆふ月 [眞珠詩社]  
 四月 △白岩艶子の白楊 [竹柏會]  
 小林愛雄譯現代萬葉集 [愛音會]  
 五月 與謝野晶子の詩歌集舞ごろも [天絃堂]  
 同 △吉井勇の東京紅燈集 [通一社]



- 五月 △橋田東聲編現代名詩選〔白日社〕
- 同 △吉井勇の仇情〔通一舎〕
- 六月 △若山牧水の朝の歌〔天絃堂〕
- ◎平田禿木註近代英詩選〔阿蘭陀書房〕
- 同 佐々木指月の郷愁〔抒情詩社〕
- 同 △山田邦子の光を慕ひつゝ〔曙光社〕
- 七月 △西村陽吉の都市居住者〔東雲堂〕
- 同 北原白秋の雪と花火〔東京堂〕
- 南日恒太郎の英詩藻鹽草〔北星堂〕
- ◎教育學術研究會編聖タゴール〔同文館〕
- 九月 土岐哀果の雜音の中〔東雲堂〕
- 同 △中西赤吉の唱名〔抒情詩社〕
- 同 △吉井勇の黒髮集〔千章館〕
- 同 百田宗治の一人と全體〔表現發行所〕

- 九月 △前田夕暮の深林〔白日社〕
- 同 △藤田豪之助の教師の歌へる〔盛文堂〕
- 十月 △窪田空穂の鳥聲集〔日東堂〕
- 十一月 △間島琴山の檜扇〔天絃堂〕
- 同 △中村憲吉の林泉集〔アラ、ギ發行所〕
- 同 △原阿佐緒の白木樫〔東雲堂〕
- 同 △田村飛鳥の鳴かぬ鳥〔白日社〕
- 同 △新井恍の微明〔竹柏會〕
- 同 川路柳紅編伴奏第一輯(冬の卷)〔曙光詩社〕
- 十一月 ×二十七日、エミール・ヴェルハールン逝く
- ◎藤浪由之のハイネ評傳〔洛陽堂〕
- 十二月 土屋充の眞珠頌〔聖星詩社〕
- 同 菱沼平治譯コトマス〔丁未出版社〕



十二月 湯淺竹山人の小唄選 [阿蘭陀書房]  
大正六年一月 △吉井勇の吉井勇集 [新潮社]

稻村眞理詩歌集垂穂集 [文淵堂]

川路柳虹の伴奏第二輯(新春の巻) [曙光詩社]

有本芳水の旅人 [實業之日本社]

二月 山宮允譯現代英詩抄 [有朋館]

同 萩原朔太郎の月に吠える [感情詩社]

中山昌樹譯ダンテ新生 [洛陽堂]

同 ◎川路柳虹の詩歌講義録出づ

三月 △茅野雅子の金沙集 [岩波書店]

星野水裏の赤い椿 [實業之日本社]

四月 ◎若山牧水選わか愛誦歌 [東雲堂]

×小倉博の本邦韻文の韻律に就て (東亞の光)

川路柳虹編伴奏第三輯(春の巻) [曙光詩社]

同 △土岐哀果の土岐哀果集 [新潮社]

大田黒元雄の日輪 [音楽と文學社]

五月 △杉浦翠子の寒紅集 [平安堂]

向井夷希微のよみがへり [同人]

◎折口信夫の口譯萬葉集 [文會堂]

◎山川丙三郎譯神曲 [警醒社]

◎上田敏の近代の藝術 [實業之日本社]

同 △渡邊湖畔の草の葉 [天絃堂]

同 羽衣・雨江・桂月合著美文韻文續花紅葉 [博文館]

六月 △長塚節の長塚節歌集 [春陽堂]

生田春月譯散文詩 [新潮社]

太田黒元雄の春の圓舞 [音楽と文學社]

七月 伴奏第四輯 [曙光詩社]

北村初雄の吾歳と春 [未來社]



- 七月 向井夷希微の胡馬の嘶き〔同人〕
- △岡澄里の橙里全集〔新潮社〕
- 同 △谷本知安の梨花集〔抒情詩社〕
- 同 △青井勇の祇園双紙〔新潮社〕
- 八月 △片口安之助の寂しき路〔抒情詩社〕
- 同 △若山牧水同喜志子の白梅集〔抒情詩社〕
- 九月 山村暮鳥の詩文集小さな穀倉より〔感情詩社〕
- 同 近藤榮一のサマリヤの母〔無我山房〕
- △太田黒元雄の祇園の春〔音楽と文學社〕
- △林信一の栗の花〔抒情詩社〕
- 同 △中山雅吉の流轉〔珊瑚礁社〕
- 同 △米田雄郎の日没〔白日社〕
- 同 △夕暮の前田夕暮集〔新潮社〕
- 十月 △西村陽吉選我等〔青テーブル社〕

- 大正七年一月
- 十月 佐藤惣之助の狂へる歌〔無我山房〕
  - 十一月 伴奏第五輯〔曙光詩社〕
  - 同 平井晚村叶九双の茶摘唄〔白瓶社〕
  - 十二月 日夏歌之介の轉身の頌〔同人〕
  - 岡田哲藏の我が環境〔六台雜誌社〕
  - 薄田泣菫の子守唄〔富山房〕
  - 生田春月の靈魂の秋〔新潮社〕
  - △新開竹雨の朱泥〔竹柏會〕
  - ◎金子健二譯カンタベリ物語〔東亞堂〕
  - △稻村眞里の垂穂集〔春水社〕
  - △牧野英一のあかしや〔牧野英一〕
  - △室生犀星の愛の詩集〔聚英閣〕
- ◎詩篇發賣禁止  
有本芳水のふるさと〔實業之日本社〕



- ◎松浦一の生命の文學〔寶文館〕
- ◎樋口紋太の新詩の作り方〔いろは書房〕
- 二月 ◎現代詩歌創刊
- ◎新進詩人創刊
- 感情の竹村俊郎詩集號
- 三月 △川田順の伎藝天〔竹柏會〕
- 詩歌文集白樺の森〔新潮社〕
- 四月 ◎大洋の岸邊創刊
- 同 ×東京日々新聞にて國詩を募集す
- 木村鷹太郎譯詩文集バイロン傑作集〔あきらめ俱樂部〕
- △高橋刀呷の果樹園〔竹柏會〕
- 岡田哲藏の My Environments〔六合雜誌社〕
- △大村八代子の山彦〔竹柏會〕

- ◎室生犀星の新しい詩とその作り方〔感情詩社〕
- 五月 千家元麿の自分を見た〔玄文社〕
- 五月 明石國助鶴卷恒松竹田勝太郎合著素描〔野村氏〕
- 同 堀口大學の佛蘭西近代詩集の譯昨日の花〔靱山書店〕
- ◎雜誌韻律生る
- ◎民衆の北村透谷號
- 六月 ◎未來社の人々のリズム生る
- 七月 ◎感情の室生犀星詩集號
- 東京日々募集國詩選集〔東京圖書刊行會〕
- ◎上田敏譯ダント神曲〔修文館〕
- △田山花袋の花袋歌集〔春陽堂〕
- ◎民衆の花岡謙二詩集號
- ◎帆足理一郎の人生詩人ブラウニング〔洛陽堂〕



- 八月 西出朝風の唐人笛〔純正詩社〕
- 九月 ◎生田春月の新しき詩の作り方〔新潮社〕
- 同 土岐哀果選啄木選集〔新潮社〕
- 同 室生犀星の抒情小曲集〔文武堂〕
- 同 平井晩村の麥笛〔玄文社〕
- 同 百田宗治のぬかるみの街道〔同人〕
- 同 小林愛雄佐武林藏譯近代詩歌集〔佐古書肆〕
- 十月 川路柳虹の勝利〔曙光詩社〕
- 同 生田春月の感傷の春〔新潮社〕
- 同 松本福督のはるはよみかへる〔曙光詩社〕
- 同 ◎苦惱者創刊 高安月郊の月郊詩集〔同人〕
- 十一月 山村暮鳥の風は草木にさゝやいだ〔白日报社〕
- ◎心の花の賀茂眞淵號
- ◎山宮允の詩文の研究〔建文館〕

- 豊田實のThe Daybreak〔建文館〕
- ◎國學院雜誌眞淵記念號
- ◎前田夕暮主宰の詩歌廢刊す
- ◎佐佐木信綱梅野滿雄編大隈言道〔佐佐木信綱〕
- 七年十二月 △窪田空穂の土を眺めて〔國民文學社〕
- 柳澤健熊田精華北村初雄の合著海港〔文武堂〕
- ◎民衆のトラウベル記念號
- △窪田空穂の最新一萬集〔越山堂〕
- ◎西宮藤朝の新詩歌論講話〔新潮社〕
- 一月 ×白鳥省吾の散文詩の要求〔詩歌〕
- ×西條八十の大正六年の詩壇〔文章世界〕
- 二月 ×泡鳴のホイットマンの思想と形式〔現代詩歌〕
- ×野口米次郎の米文壇に於けるホイットマンニズム  
の失敗〔現代詩歌〕



- ×白鳥省吾の民衆詩人としてのホイットマン（現代詩歌）
- ×柳澤健の靈魂の秋の考察〔新潮社〕
- ×山宮允日夏歌之助の著轉身の頌を評す（早文）
- 三月 ×山宮允のイマジズムとは何ぞや（現代詩歌）
- ×柳虹の寫象派の態度（現代詩歌）
- 同 ×柳澤健の新しき三詩人（文章世界）
- 四月 ×晚翠の四十三字歌（帝文）
- 同 ×福士幸次郎の詩壇に於ける私の辯明と主張（文章世界）
- 同 ×岩野泡鳴の散文詩の實例的説明（文章世界）
- 同 ×川路柳虹の詩壇に於ける民主派人道派（文章世界）
- 五月 ×與謝野寛のボオルフォールの印象（現代詩歌）

- 五月 ×三木露風の口語詩運動のころ（早文）
- 同 ×柳虹の現代の樂天詩人ボォール（現代詩歌）
- 同 ×齋藤勇の詩語論（現代詩歌）
- 同 ×井上哲次郎の新體詩の起原及將來の詩形（帝文）
- 六月 ×川田順の伎藝天を評す（帝文）
- ×山宮允のマーテルリングの詩に就て（現代詩歌）
- 七月より九月 ×岡崎義惠の現詩壇の展望（帝文）
- 七月 ×山宮允の詩歌と戦争（現代詩歌）
- 八月 ×佐々木信綱の近世歌壇の第一人（帝文）
- 同 ×川路柳虹の最近の韻律問題（文章世界）
- 九月 ×茅野蕭々ウイルヘルム、シヨルツの詩（帝文）
- 十月 ×福士幸次郎の現詩壇の爲のProtect（帝文）
- 同 ×野口米次郎の英國詩界の現在（現代詩歌）
- 十一月 ×山宮允の象徴主義解説（現代詩歌）



- 十一月 ×齋藤勇の英詩に於ける國家觀念の發達を論ず  
(思潮)
- 同 ×川路柳虹の口語詩以後の詩壇 (現代詩歌)
- 同 ×松永信成のゾロク論 (思潮)
- 同 ×多田不二の室生氏著抒情小曲集を讀む (感情)
- 十二月 ×佐々木信綱の明惠上人詩歌に就きて (帝文)
- 同 ×富田碎花の詩に於ける新精神の一使徒 (英文)
- (民衆)
- 同 ×白鳥省吾のホーレストラウベル論 (民衆)
- 同 ×福田正夫のトラウベル詩集 (民衆)
- 大正八年一月 堀内大學の月光とビエル (靑山書店)
- 同 金子保和の赤土の家 (麗文社)
- 二月 生田春月譯ハイネ詩集 (新潮社)
- 同 △堀内大學のパンの笛 (靑山書店)

- 二月 ◎厨川白村の小泉先生その他 (積善館)
- 三月 富田碎花の地の子 (大鏡閣)
- 美川康の杜の家
- 生田春月の日本近代名詩集 (越山堂)
- △吉井勇の<sup>自歌</sup>自選<sup>草珊瑚</sup>草珊瑚
- 伊藤白蓮の几帳のかけ (玄文社)
- 四月 詩話會編日本詩集 (新潮社)
- ◎柳澤健等七人にて詩王を出
- △谷野禎藏の半世 (武庫短歌會)
- △野田守雄の寂しき春 (同人)
- △宇都野研の姉妹のまへに立ちて (竹柏會)
- 生田春月編泰西名詩譯集 (新潮社)
- ◎短歌雜誌萬葉新研究號
- 竹村俊郎の葦茂る (感情詩社)



- 五月 矢野峰人の黙禱〔水養社〕
- 霜田史光の流れの秋〔文武堂〕
- 同 犀星の第二愛の詩集〔文武堂〕
- 同 三木露風等撰日本象徴詩集〔玄文社〕
- 同 生田春月譯ゲーテ詩集〔新潮社〕
- 同 土井晚翠の曙光〔金港堂〕
- 同 白鳥省吾譯ホイットマン詩集〔新潮社〕
- 同 現代詩歌ホイットマン記念號
- 同 森林太郎譯詩文集蛙〔玄文社〕
- 六月 三石元茂のびいどろ〔東雲堂〕
- 同 野口雨情の都會と田園〔銀座書房〕
- 同 白鳥省吾の大地の愛〔抒情詩社〕
- 同 川路柳虹の小曲詩集はつ戀〔玄文社〕
- 同 西條八十の砂金〔尙文堂〕

- 六月 有本芳水の悲しき笛〔春陽堂〕
- 同 △加藤東籬集〔創作社〕
- 同 富田碎花の譯ホイットマンの草の葉第一卷〔大鏡閣〕
- 七月 武者小路實篤の雜三百六十五〔曠野社〕
- △金澤甚衛同まつ子の小草〔白水社〕
- 啄木全集第二卷〔新潮社〕 △椎葉集〔水養會〕
- ◎白鳥省吾の民主的文藝の先驅〔新潮社〕
- 竹久夢二の歌時計〔春陽堂〕
- 八月 白秋小唄集〔アルス〕 夢二の夢のふるさと〔新潮社〕
- 同 橋本實俊の地平の春〔文武堂〕
- 同 園頼三船川未乾の詩畫集自己陶醉〔表現社〕
- 同 △與謝野晶子の火の鳥〔文淵堂〕
- 九月 川路柳虹譯エルレーヌ詩集〔新潮社〕



- △中原潔子の潔子集〔竹柏會〕
- ×佐藤清の詩と音楽〔六合雜誌〕
- △花田世大のはなびら〔文武堂〕
- 千家元麿の虹〔新潮社〕
- 土井晚翠の晚翠詩集〔博文館〕
- 十月 ◎詩王のダンメンチオ號を出す
- 北原白秋のトンボの眼玉〔アルス〕
- 村尾節三童謡〔洛陽堂〕
- 同 藤森秀夫のこけもも〔文武堂〕
- 同 △小田哲彌の隠り沼〔潮音社〕
- 同 瀨田彌太郎の巡禮と怪獸〔抒情詩社〕
- 同 △田畑秀の狐のたばこ〔從吾會〕
- 同 馬場睦夫のポオドレエル詩集惡の華〔洛陽堂〕
- 同 藤浪由之譯初戀と散文詩〔有朋堂〕

- 十月 ◎川崎備寛ホキトマン訪問記〔聚英閣〕
- 十一月 ◎現代詩歌のトラウベル追悼號
- 同 米澤順子の聖水盤〔東京堂〕
- 同 木下奎太郎の食後の唄〔アララギ〕
- 同 △木下利女の紅玉〔玄文社〕
- 同 △半田良平の野づかさ〔國民文學社〕
- 同 △與謝野晶子全集〔新潮社〕
- 同 賀川豊彦の涙の二等分〔福永書店〕
- 同 勝田香月の旅と涙〔國民書院〕
- 同 △佐瀬蘭舟の氷海〔短歌研究會〕
- ◎西宮藤朝の近代十八文豪と其の生活〔新潮社〕
- 黒田忠次郎の寂寥の家
- △松本はつ子の柳の葉〔竹柏會〕
- △尾上柴舟の空の色〔東雲堂〕



- 十二月 黒川鋭雄の生の悩み〔奎文社〕
- 同 生田春月の春月小曲集〔新潮社〕
- 同 詩文集集白樺の林〔聚英閣〕
- 同年一月 ×野口米次郎ロバート・ブリツヂェスの自然観〔現代詩歌〕
- 代詩歌)
- 同 ×茅野蕭々の最近の獨逸詩壇〔現代詩歌〕
- 同 ×山宮允の英詩壇の現状〔短歌雜誌〕
- 四月 ×前田春聲山宮氏の詩文研究を評す〔詩王〕
- 同 ×百田宗治の富田碎花の新詩集評〔讀賣〕
- 五月 ×山宮允の輓近詩壇の傾向を論ず〔新潮〕
- 六月 ×福田正夫解放されたる詩を求む〔新潮〕
- 六七八九十月 ×岡崎義惠の日本詩歌の氣分象徴〔帝文〕
- 八月 ×柳澤健霜田史光の流れの秋を評す〔文章世界〕
- 同 ×中西赤吉の第二愛の詩集を讀みて〔短歌雜誌〕

- 九月 ×百田宗治の眞の人間詩〔抒情文學〕
- 同 ×生田春月の詩壇に對する祝福と忠言〔抒情文學〕
- 十月 ×長沼重隆トラウベル死せり〔讀賣〕
- 十一月 ×矢野峰人の近時の詩界〔帝文〕
- 十二月 ×生田春月の詩壇の回顧〔讀賣〕
- 同 ×川路柳虹の本年詩壇のこと〔早文〕
- 同 ×若山牧水の本年歌壇の回顧〔讀賣〕
- 大正九年一月 西條八十の譯詩白孔雀〔尙文堂〕
- ◎中島清譯ワグネル歌劇集〔新潮社〕
- 佐竹草迷宮のおさな心〔玄文社〕
- ◎平田禿木註近代英詩選〔アルヌ〕
- 小川未明の童謡童話集金の輪
- 昇曙夢譯ろしや民謡集〔大倉書店〕
- 二月 白秋の小唄集わすれな草〔アルヌ〕



二月

多田不二の惱める森林 [文武堂]

◎英文學會編英文學研究第一冊 [研究社]

◎藤森秀夫の主幹雜誌詩聖出づ。

富田碎花等の民衆藝術選 [聚英閣]

生野源太郎の手をあげて唄へる [佐藤書店]

×ダンテ協會の創設 (讀賣)

△窪田空穂の朴の葉 [東雲堂]

◎仙臺の詩人の雜誌玄土出づ。

×土居光知の日本文學を通じて見たる文化の展開

(哲學雜誌)

三月

象徴詩人デエメル死す

室生犀星竹村俊郎多田不二相川俊孝等の合著感

情同人集 [感情詩社]

◎中山昌樹の詩聖ゲーテ [春陽堂]

三月

村山槐多の遺著感想及詩集 [アルス]

白鳥省吾の小曲及散文詩集幻の日に [新潮社]

園頼三の蒼空 [表現社]

櫻澤如一のポオドレエル譯詩集惱みの花 (ロー

マ字)

○愛蘭の詩人ジエムス・カズン氏慶大を去る

井上康文編日本現代名詩集 [春陽堂]

白秋の散文詩集雀の生活 [新潮社]

四月

福田正夫譯トラウベル詩集 [新潮社]

×土居光知の日本文學の展開 [哲學雜誌]

川本眞七のうつけどり [求我堂]

△薰園の静まれる樹

小田秀一の戀はゆく [文武堂]

×ゼームスカズンスの詩の形式と本質 (詩王)



- 四月 ×三木露風の自然詩人藤森君の未來に就て〔讀賣〕  
 △晶子短歌全集(二)〔新潮社〕  
 ×福士幸次郎の抒情詩主義の宣言〔讀賣〕  
 ×童謡中心の幼年雜誌多く出づ  
 五月 ×岩野泡鳴逝く年四十八。十一日告別式に方り蒲  
 原有明故人の詩に就て述ぶ  
 ×馬場孤蝶の人としての泡鳴氏〔讀賣〕  
 福田正夫の詩劇集哀樂兒〔聚英閣〕  
 根本正吉等の勞働詩集どん底で歌ふ  
 和田利彦編の日本現代名詩集〔春陽堂〕  
 ×竹友藻風、西條八十の白孔雀を評す〔早文〕  
 六月 西條八十の靜かなる眉〔尙文堂〕  
 矢部季の香炎華〔巡禮詩社〕  
 福士幸次郎の展望〔新潮社〕

- 六月 村山槐多の詩歌散文集槐多の歌へる〔アルス〕  
 △生田春月譯ハイネの小曲集〔越山堂〕  
 △前田春聲の韻律と獨語〔尙文堂〕  
 ×西條八十の尼港虐殺の詩〔讀賣〕  
 ◎白蓮の戯曲指鬘外道  
 ×白鳥省吾の民衆詩と民謡〔新潮〕  
 ×石原純の短歌連作論〔アラ、ギ〕  
 ×三井甲之日本現代名詩集を讀む〔讀賣〕  
 ×現代作家創作年譜〔中央文學〕  
 近衛直麿の和弦〔敬文館〕  
 土井晚翠の天馬の道に〔博文館〕  
 ◎八木又三の和歌形式論〔裳華房〕  
 七月 △青木光二の落椿〔尙文堂〕  
 詩話會編日本詩集 1930 版〔新潮社〕



七月 ×新城和一の民衆詩人としてのエルハレン(讀賣)

百田宗治の現代詩選

國木田獨歩の詩及小品集〔新潮社〕

樋口紅陽編地上の光〔文献社〕

重松証太郎の祭壇炎上〔鈴屋〕

八月

富田碎花のカアペンタア詩集〔新潮社〕

室生犀星の寂しき都會〔聚英閣〕

白秋詩集第一卷〔アルス〕

白蓮の几帳のかけ〔玄文社〕

九月

×土居光知の日本文學の展開〔哲學雜誌〕

九月

×野口雨情等の東京童謡會成る。

△左千夫全集一卷〔春陽堂〕

△富田碎花の悲しき愛〔岡村書店〕

井上廉文の愛する者へ〔新橋書店〕

九月

竹友藻風の時の流れに〔天佑社〕

日夏耿之介譯ワイルド詩集〔天佑社〕

生田春月譯私の花環〔新潮社〕

◎漱石全集第十卷

十月

×齋藤勇主幹牧神創刊

×竹友藻風の北米詩壇の趨勢〔牧神〕

△島地四十起の炮つく夢〔上海金風社〕

◎花岡謙二の黎明より白日創刊

◎柳澤健の現代の詩及詩人〔尙文堂〕

百田宗治の百田宗治詩集〔新潮社〕

大關五郎の愛の風景〔ミドリヤ〕

古山省吾の森林の悲

上田敏の創作譯詩牧羊神〔金尾文淵堂〕

詩同人詩集の麥〔詩人會〕



十月 ×荒木茂のフイゼラルドのオムマハヤム (中央公

論)

×川路柳虹の詩の時代 (早文)

×花袋文壇的生活の回顧 (讀賣)

瀨田彌太郎の巡禮と怪獸 (抒情詩社)

向陵詩社編輯檄の森 (散文書院)

×下位春吉の伊太利語に譯せし與謝野晶子の青海

波羅馬にて出版す

×佐久間のリズムと人生 (心理研究會)

◎不二之舎歌會の銀の皿

◎彌富濱雄の短歌作法講話 (金港堂)

△澁川玄耳の山東に在り (誠文堂)

×矢野峰人の詩と韻律 (水鏡)

十一月 三木露風の小曲集生と戀 (アルス)

十一月

有島武郎譯ホキットマン詩集第一輯 (叢文閣)

新城和一の譯詩ウエルハレンの獨手ある都會

(春陽堂)

佛詩人ドリイルアダンの研究號 (玫瑰珠)

三木露風の芦間の幻影 (新潮社)

△上野春平の色なき花 (三興社)

△九條武子の金鈴 (竹柏會)

×霜田史光の民衆藝術としての新しき民謡 (讀賣)

×川路柳虹の詩と詩人の仕事 大正九年の詩壇の

こと (讀賣)

北村初雄の正午の果實 (同人)

難波專太郎の死人の言葉

古典文學研究會譯ダンテ神曲 (三星社)

×民謡に就て霜田氏に答ふ「藤森秀夫」 (讀賣)



十二月 ◎杉江重英瀬川重禮大黒貞勝の雑誌森林創刊

×新進詩人社の主催にて詩人講演會を明治會館に開く

水谷勝の寶石の夢〔尙文堂〕

正富汪洋の豊艶なる花〔洛陽堂〕

勝田香月のどん底の微笑〔國民書院〕

矢野目源一の光の處女〔靱山書店〕

生田春月譯ハイネ全集〔越山堂〕

堀口大學の譯詩失はれたる寶石〔俳書堂〕

佐藤惣之助の満月の川〔叢文閣〕

富田碎花の譯詩ホイットマンの草の葉中卷〔大

鏡閣〕

◎藤澤衛彦の小唄傳説集

齋藤勇の譯ブラウニングのサウル〔岩波書店〕

十二月

賀川豊彦の地殻を破つて〔福永書店〕

△白秋の第二木馬集〔アルス〕

×柴田勝衛の一九二〇度外國文學の概観〔讀賣〕

×川路柳虹の日本詩壇の象徴主義を論ず〔現代詩

歌〕

×福士幸次郎の音律論〔新潮〕

×福士幸次郎の抒情詩主義の宣言〔讀賣〕

大正十年一月 ×齋藤勇の三木氏の世界〔牧神〕

長谷川弘の奥ゆかしき玫瑰花〔靱山書店〕

△川田順の陽炎〔竹柏會〕

△齋藤茂吉のあらたま〔春陽堂〕

△橋田東聲の地懷〔東雲堂〕

松本俊一の永劫の笛〔アルス〕

山宮允の現代英詩選集〔英〕〔鈴木十三郎〕



一月

岡上守道譯叙事詩エウゲニイ、オネーギン〔國文堂書店〕白秋詩集卷二〔アルス〕

曉烏敏の生くる日〔香草社〕

△與謝野晶子太陽と薔薇〔アルス〕

二月

△藤村誕生五十年記念として現代詩人選集を出す〔新潮社〕

○士居光知東大美學會にて詩形論を説く

△白鳥省吾の樂園の途上〔叢文閣〕

△中川一政の見なれざる人〔叢文閣〕

◎武者小路實篤の埋れてゐたもの〔聚英閣〕

△福原清の不思議な影像〔自由詩社〕

△與謝野晶子の舞ころも〔文淵堂〕

△野口雨情の別後〔尙文堂〕

△西條八十の童謡集鸚鵡と時計〔赤い鳥社〕

二月

牧神會主催にてキーツ亡後百年記念祭を東大山上御殿に開く

三月

柳澤健譯の現代佛蘭西詩集〔新潮社〕

◎童謡雜誌とんぼ創刊

鈴木三重吉編赤い鳥童謡第四集〔赤い鳥社〕

河井醉茗の彌生集〔天佑社〕

小田秀人の命の詩第三集陰をゆくもの〔春和堂〕

竹友藻風譯ルバイヤット〔アルス社〕

△若山牧水のくろ土〔新潮社〕

△窪田空穂の青水沫〔日本評論社〕

△土田善章岸秀雄の歌はぬ鸚鵡〔自分達社〕

馬場睦夫藤波水處共譯スコットの湖上の美人

〔春陽堂〕

◎小泉八雲蟲の文學大谷繞石の譯註〔北星堂〕



三月 ◎石川林四郎のテンスンの詩研究〔研究社〕  
四月 千家元麿の野天の光〔新潮社〕

◎生田春月編日本民謡集

△吉植庄亮の寂光〔短歌研究会〕

澤ゆき子の孤獨の愛〔曙光詩社〕

樋口紅陽の編譯詩集海のかなたより

・高群逸枝日月の上を新小説に掲ぐ

五月 北原白秋の童謡集兎の電報〔アルス〕

正富汪洋茅野雅子若山喜志子共編現代婦人詩歌  
選集〔婦女界社〕

有本芳水の海の國〔實業之日本社〕

△生田蝶介の大正新選歌集搖籃〔好文堂〕

山村暮鳥の梢の巢にて〔叢文閣〕

川路柳虹詩集〔新潮社〕

五月 正富汪洋の戀愛小曲集〔金星堂〕

米川正夫の譯叙事詩オネーギン〔叢文閣〕

◎新詩人創刊

○早大詩研究会第一回講演會を開く

六月 高群逸枝の放浪者の詩〔新潮社〕

千九百二十一年版日本詩集〔新潮社〕

竹友藻風の譯詩エキルレエヌ選集〔アルス社〕

葛原幽の口語詩集小猫の鈴

野口雨情の十五夜お月さん〔尙文堂〕

◎野口雨情霜田史光共編日本民謡名作集〔民衆文

藝社〕

京谷涼二の試練の日に〔弘文館〕

藤森秀夫小唄集フリジャ〔金星堂〕

×童謡民謡演奏會を大塚高等師範學校にて開く



7-165

年表

六月 ◎岡田哲藏の評釋世界大戰の英詩〔干城堂〕

×上野精養軒にてヴェルレーインの廿五年祭を行ふ

七月 日夏耿之介の黒衣聖母〔アルス〕

◎畔柳都太郎の世界に求むる詩觀〔博文館〕

堀口大學の譯詩サマン選集〔アルス〕

山村暮鳥の穀粒〔隆文館〕

竹久夢二の青い小徑〔尙文堂〕

△佐藤寛のひなげし〔同人〕

△尾山篤二郎のまんじゆさげ〔東雲堂〕

三浦關造の祈れる魂〔隆文館〕

白鳥省吾の童謡雲雀の巢

千家元麿の太陽の愛〔隆文館〕

中央公論増刊號に都會と田園の詩を載す

佐藤春夫の殉情詩集〔新潮社〕



~~529~~

~~29~~



終